大道芸人たち
Artistas callejeros
CHAPTER 2

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2012 Yu Yaotome

目次

バルセロナ、エンパナディーリャの思い出
アヴィニヨン、レネの家族
バルセロナ、フェリス　ナビダー
グラナダ、ザクロの樹
セウタ、アフリカ大陸
セビリヤ、蛇
カルモナ、白い午後
ロンダ、崖の上より
マラガ、ハイビスカスの咲く丘
バルセロナ、色彩の迷宮

バルセロナ、エンパナディーリャの思い出

「やっと再会できましたね」
蝶子の頬に熱いキスをしてカルロスは言った。稔は久しぶりにカルロスを見て、やっぱりギョロ目だと思った。記憶の中でこの巨大な目と濃い眉がデフォルメされてしまったのかと思っていたが、実物は記憶以上だった。
　コモから、直に南スペインに向かうのでバルセロナにも立ち寄りたいと電話すると、カルロスは大喜びで、滞在中は彼の自宅に泊まれ、出来ればクリスマスと新年もここで迎えろと言った。蝶子は耳を疑った。
「でも、それじゃ一ヶ月もいる事になっちゃうわ」
「一ヶ月どころか、ずっといていただいて構わないんですけれどね。まあ、あなたたちは自由が好きなんでしょうから、思うがままに出入りしていただいて構わないんですよ」
いったい何の因果でこんなに親切なのかよくわからないが、とにかく「四人で」向かうと伝えておいた。カルロスはバルセロナの駅に迎えをよこすと言っていたが、来てみたら本人が運転手と一緒に待っていた。
「ああ、では、こちらが新しいメンバーなんですね」
稔とレネに握手をした後、カルロスはヴィルに笑いかけた。稔が紹介した。
「そうだ、初対面だったね。ヴィルだ。俺たちはテデスコと呼んでいる。ドイツ人だから」
「よろしく」
ヴィルはいつも通りの無表情で握手をした。
　カルロスは小さなバンに四人を案内した。運転手がドアを開けると、カルロスは蝶子の手を取ってバンに乗るのを助けた。稔は感心した。ラテン民族の女の扱いには敵わない。しかし、それに堂々と応える蝶子の女としてのスマートさは、そこらの日本人にはマネが出来ない。こいつ、いつからこんな風になったんだろう。
　大学時代の蝶子は少なくともこんな風ではなかった。容貌や服装は大きく変わっていない。きつい性格も前とそんなに違いはない。だが、立ち居振る舞いが全く違う。たとえば園城真耶は生まれたときからのお嬢様生活で、他のクラスメイトとは全く違う立ち居振る舞いをしていた。立ち方、歩き方、ものを取るときの手つき、驚いたときの振り向き方、全てが優雅で流れるようだった。蝶子はそんな動きはしなかった。それで当時の蝶子の美しさが損なわれていると感じた事はなかったが、今の蝶子はあの当時の彼女とは較べものにならないほど洗練されている。その違いは歴然としている。蝶子は存在だけで当時よりずっと美しかった。それは動きなのだ。
　稔が三味線を弾く時には、すっと姿勢がよくなる。それ以外の動きで三味線を弾く事は出来ない。その姿勢は稔の体に染み付いている。だから、蝶子がフルートを吹く時に洗練されて美しいのは当然だった。けれど、稔は歩いているときや、食事をしているとき、または車に乗り込むときの動きなどまったく意に介さない。だが、蝶子にはその全てに洗練された怜悧な優雅さ

が備わっている。カルロスが大道芸人の女を姫君のように扱うのは、この蝶子の美しさにあるのだと稔は解釈した。
そこまで考えて、ふと、どこかでもこんなことを考えたぞ、と思った。それから目をドイツ人に動かした。そうだ、こいつの動きだ。着古したジーンズを履いて、普通の町中のカフェで足を組んでいても、どこか稔やレネとは違う。かつてそれに氣づいた時に、稔はよく観察した事がある。稔やレネの腰は、だらりと椅子の前方にあり、背中が椅子から離れて丸まっていたが、ヴィルはきっちりと椅子の背に深く腰掛けていた。稔の足は投げ出されていたが、ヴィルの組んだ足にはどこかまだ緊張があった。違いはそれだけだった。だが、そのわずかの姿勢の違いが、明白にあか抜けた洗練を生む。普段は誰も目に留めないが、それがコモでのようにきちんとした服装を身に纏う時に大きな違いとして表れるのだ。稔はふいに、確信を持った。こいつはただの庶民じゃないな。真耶や蝶子がどこかで身につけたような上流階級の躾をどこかで受けているに違いない。

四人もの風来坊に一ヶ月も泊まれと言うくらいだから、小さな家だとは思っていなかった。だが、それは家ではなかった。少なくとも稔や蝶子のような日本のごく普通の家庭に生まれたものにとってはそれは家と呼ぶようなものではなかった。城と呼びたい所だ。もちろんフランスやドイツの城のようには大きくない。しかし、単に館と呼ぶのは奥ゆかしすぎる。門から直接建物が見えないというのも驚いたが、三階建ての建物に一目で二十室以上部屋があるのがわかったのにも目を白黒した。重厚な木のドアを開けて中に入ると、外見のシンプルな白っぽい石の造りと相反して、スペインらしい色使いのインテリアだ。エントランスの床は白い大理石、柱や階段の桟は濃い茶色の木だった。赤いアラベスク模様の絨毯が敷かれ、極楽鳥草や薄いオレンジの薔薇などが生けられた大きな花瓶が置かれている。
「あなた、何者なの？」
呆れて蝶子は訊いた。
「ただの実業家ですよ。ただ、この家と土地は先祖から受け継いだものです」
「イダルゴか」
ヴィルがつぶやいた。
「その通り」
カルロスは答えた。稔は蝶子をつついて日本語で解説を求めた。
「イダルゴってなんだよ」
「郷士っていうんじゃなかったかしら、日本語では。土地を持っている下級貴族よ」
「ふ〜ん。ある所にはあるんだな。ま、じゃ、ちょっと贅沢のおこぼれをいただくか」
稔はつぶやいた。

四人はそれぞれ客間をあてがわれた。蝶子は使っていいと言われた大きなバスルームに案内されてにっこりと笑った。なんて豪華なバスタブかしら。アラベスク模様の寄せ木造のついたてなど、無駄に装飾のある空間がとても氣に入った。
こんなに贅沢な建物にゲストとして滞在するのはミュンヘン以来だった。エッシェンドルフ教授の館は、このカルロスの館に匹敵する大きさと贅沢な空間だった。彼もまた先祖伝来の広大な領地を持ち、本来、

働く必要などない特権階級の一人だった。彼の完璧主義のために館の調度は常に完全な状態に保たれていた。ドイツ式の緻密で優美な内装。使用人が必死に磨く真鍮の桟や取手。または塵ひとつなく掃除された室内。蝶子は五年以上の時間をその館で過ごした。留学当初に借りた小さな学生用フラットは質実剛健そのもので不必要なものなど何もない空間だったので、教授のレッスンを受けるために最初にその館に行った時にはあまりの豪奢に落ち着きを失ったものだ。しかし、直に蝶子はその館に慣れてしまった。学生用フラットには共用のシャワーしかなかったので、エッシェンドルフの館でバスタブに浸かったときの幸福感は何にも代え難いものに思われた。その記憶が、蝶子をバスルーム好きにした。今の蝶子は、バスルームよりも自由の方がはるかに大切である事を十分に自覚している。それでも、このように機会があれば最高の贅沢の一つとしてバスタイムを愉しむこともやぶさかではなかった。

「紹介するよ。普段、料理をしてくれるイネスだ」
カルロスが居間でくつろぐ四人の所に連れてきたのは丸まると太った優しそうな年配の女性だった。代わる代わる握手をする四人に暖かく笑いかけてイネスは言った。
「何か食べられないものはありますか？」
四人は顔を見合わせた。
「何でも食べるよな？　俺たち」
「そうよね。サルの脳みそとかじゃない限り」
「魚は食べられますか？」
日本人二人はにんまりと笑った。
「俺たち日本人だから。もちろん魚は喜んで食べるよ。イカもタコも海老も」
「そちらのお二人は？」
「自分では注文しないが、出てきたら食べる」
ヴィルがいうと、蝶子が意地の悪い顔をした。
「やっぱり北ヨーロッパ人はダメよねぇ。魚の美味しさを知らないなんて」
「出てきたら食べるって言っているだろう」
ムッとするヴィルの横で、いいにくそうにレネが打ち明けた。
「僕、魚は平氣だけれど、生のタマネギが苦手です。努力はしますけれど……」
「あら、それは私も苦手だわ」
蝶子がそういうと、ヴィルがほんの少し勝ち誇ったように眉を持ち上げた。
「でも、料理には入れてくださって構いませんわ。この人に食べてもらうから」
蝶子がヴィルを指した。
　イネスは笑って、台所に姿を消した。
「彼女の料理は天下一品ですからね。きっと、苦手なものも克服できるようになるでしょう」
カルロスは言った。蝶子はカルロスを振り向いた。
「ねえ、でも、本当に迷惑だったら言ってね。あらかじめ言っておくけれど、私たちお酒飲んで大騒ぎするの」

「わかってますよ。酒蔵にすぐに案内しますか？」
「やだな。酒ぐらいは稼いで買ってくるよ」
稔が言った。他の三人も頷いた。カルロスは肩をすくめた。
「わたしも宴会に混ぜてもらうつもりですから」
蝶子は微笑んだ。

「さ、お茶にしましょう。スペインは夕食が遅いので、四時頃におやつを食べるんですよ」
イネスが声をかけた。
　四人はカルロスと食堂に移った。黒檀のテーブルにコーヒーと揚げ物が用意されている。イネスがそれぞれの前の皿に一つずつ巨大な揚げ餃子にみえる菓子を置いて言った。
「エンパナディーリャって言うんですよ。たいていは塩味のものを入れておかずのようにするんですけれど、今日はアプリコットジャムを入れて揚げたんです」
　最初に手をつけたのはレネだった。一口食べて、それを皿に置いて、それから眼鏡を取って泣き出した。全員がびっくりしてレネを見た。
「どうしたんだよ、ブラン・ベック」
向かいに座っていた稔が訊いた。
「こ、この味です。子供の頃、母さんが作ってくれたお菓子……」
「なんだよ。泣く事かよ」
レネは涙を拭って、語りだした。
「僕には、二つ年下の妹がいたんです。体が弱くて、外に遊びにいったりできなくて、遊び相手は僕だけでした。母さんはよく、これとそっくりのお菓子を作ってくれました。妹の大好物だったからです。僕もこのお菓子が大好きだったけれど、妹が欲しがるので我慢していつもあげてしまいました。父さんから妹はもう長く生きられないと言われていたからです」
　レネの言葉に、コーヒーを飲んでいた他の三人は、手を止めた。レネは続けた。
「妹は、本当に長く生きられませんでした。かわいそうに、あんなに小さかったのに、苦しんで病院でチューブだらけになって……。母さんに、揚げ物のお菓子が食べたいと言って、でも、最後は力がなくって食べられなくって。妹が死んでから、母さんはずっと泣いてばかりいました。やっと少し元氣になってきた時に、その話をしたら、また母さんが泣いてしまって。僕はそれで母さんに食べたいからこのお菓子を作ってほしいと言えなくなってしまったんです。あれから二十年以上も、どこかでこれを食べたいと思っていたけれど……」
　ヴィルが自分の皿に置かれていたエンパナディーリャをレネの皿に置いた。続いて稔と蝶子もほぼ同時にレネの皿めがけて自分の菓子を投げ込んだ。皿に並んだ四つのエンパナディーリャを見て、レネは再び泣き出した。今度は号泣だった。
イネスは呆れていった。
「まだ、ここにはこんなにあるんですよ。何もあなたたちがあげなくても」
　けれど、その四つは他のエンパナディーリャとは違っていたのだ。三人が他の人間とは違うように。レネは泣きながら四つの菓子を平らげた。後でまたイネスにもらって食べた稔は、どうやったらこんなに

大きくて甘くて脂っこいものを四つも食べられるんだと首を傾げた。
「来週、この館でクリスマスのパーティがあるんですよ。よかったら参加してください。あなた方のショーも披露してもらえると嬉しいですね」
カルロスの申し出に四人は喜んで同意した。
パーティに使う広間にはスタンウェイのグランド・ピアノがあった。それで、昼はバルセロナの街で稼ぎ、大量に酒を買ってきて、夜は広間で打ち合わせと称して音楽を奏で、手品を楽しみ、そして宴会をすることになってしまった。
　もちろん、その他に三食イネスのスペイン料理にも舌鼓を打つ。カルロスの言葉は嘘ではなかった。イネスの料理は絶品だった。地中海の幸、肥沃なスペインの山の幸が贅沢に、しかし、飽きのこない家庭的な味付けでこれでもかと出てくる。魚介類が苦手だったはずのヴィルでさえ、自分からお替わりをするほどだった。もちろん酒類は必須で、ペネデスの白ワイン、リオハのティント（赤ワイン）やシェリーを傾けながら食事を楽しんだ。蝶子のお氣に入りは赤ワインと炭酸飲料を半々にして作ったティント・デ・ベラーノというカクテルだった。
　カルロスが仕事で館を留守にする時は、イネスがテーブルに座って四人と話をした。
「カルロス様は、皆さんがいつ見えるかと、本当に楽しみにしていらしたんですよ。私もどんな方々かと興味津々でした」
「カルちゃんは、こういう風来坊をしょっちゅうお館に引き入れているの？」
蝶子が訊く。
「めったにありませんね。でも、仕事やプライヴェートのお友だちが泊まりにくる事はよくあります。このお屋敷にはそもそも部屋がありすぎるんですよ。お一人だとお寂しいんじゃないですか」
「ギョロ目はずっと一人もんなんだ？」
稔はついにギョロ目と呼ぶ事にしてしまったが、誰も何も言わなかった。当のカルロスさえも。
「ご結婚を解消なさってから、五年ほどになられますが、あれから長く続いた方はまだいませんね。お忙しすぎるってこともあるんでしょうけれど、ご結婚には懲りていらっしゃるみたいで」
イネスはくっくと笑った。どんな奥さんだったのだろうと四人は想像をそれぞれめぐらせた。

　バルセロナの街は活氣に溢れていた。もう相当寒かったので仕事をするのは十時から四時間ほどだったが、宿泊代を考えなくていいので相当の金額が酒類に費やされ、バンを買うための貯蓄を引いても、まだ十分な金額が手元に残った。コモのロッコ氏のレストランでも相当の余剰金ができた。これからの厳しい冬を乗り切るには運のいい状態と言ってよかった。
　ロッコ氏は来年も同じ時期にまた働いてほしいと言った。そう言ってくれるのは有難かった。四人は来年の事に思いを馳せた。それぞれが大道芸を始めた時には考えられないことだった。蝶子はコルシカフェリーの上で不安と寄る辺なさに心を悩ませていた。行くところも待っている人間もなかった。稔はいつ終わるとも知れない大金の返済

と罪の意識に疲れていた。レネは仕事と恋人を同時に失い人生が嫌になっていた。ヴィルは父親から自由になりたかった。一度も見た事のない父親の婚約者が実行したように。
お互いに一人ではできなかったことが、Artistas callejeros としてチームを組む事で可能になった。大道芸としても、また、トネッリ氏のバーやロッコ氏のレストランで展開したショーもその完成度の高さとお互いのプロ意識、そして友情のもたらす信頼関係で高い評価と報酬をもたらした。偶然の出会いがもたらしたカルロスのような親切な人間の助けで、このように贅沢で楽しい日々を送る事すら出来るようになった。
　稔は去年の冬の事を考えていた。何回か安宿に泊まる金も稼ぎだせず、大都市の地下鉄で夜を過ごした。自分は何をしているのだろうと思った。日本に帰ろうにも航空券を買うなど不可能だった。夏の間に稼いだ余剰金はすべて遠藤陽子に送った。送っても送っても完済にはほど遠かった。なぜこんな事を続けているのか、わかってくれる人間はこの世の中にはいないと思った。生涯浮浪者のように生きるしかないと思っていた。それがどうしたことか。お城のような館で、美味いものを食べながら、仲間と酒宴の日々だ。バンを買って、みんなでヨーロッパ中をめぐろうと夢を語っている。高校生の時に夢を見ていたようにギターで生活費を稼いだりもしている。人生、先の事は本当にわからないものだ。諦めないで本当によかったと思う。

アヴィニヨン、レネの家族

　新年まで、ずっとバルセロナで稼ぐのも退屈だという話になった。どうせなら近場に移動して、クリスマスまでにここに戻って来ようかと話がまとまったのだ。問題は、どこに行くかということだった。
「行き先が多数決なのはよくわかっているんですけれど」
レネがおずおずと言い出した。
「どこか、どうしても行きたいところがあるの？　ブラン・ベック」
蝶子が優しく訊いた。
「これからもっと南へ行くんだし……、アヴィニヨンにはもう戻れませんよね。」
「フランス、プロヴァンスか。ここからなら半日で戻れる。年内に行きたいのか？」
ヴィルが言った。
「橋のある所だよな？　特別な思い入れがあるのか？」
稔が訊いた。レネはもじもじと、とても言いにくそうに答えた。
「僕の生まれた家があるんです……」
三人は一瞬黙ったが、一斉に笑い出した。
「わかったよ。そりゃ行きたいだろう。行こうぜ」
稔が言った。蝶子はヴィルに言った。
「アウグスブルグには行かなくていいの？」
ヴィルは首を振った。
「俺の家族はいないんだ」
　三人にはアウグスブルグにヴィルの家族がいないのか、ヴィルに全

く家族がいないのかわからなかったが、ヴィルが何も付け加えなかったので、それ以上訊かなかった。少なくともレネのように帰りたがってないことは確かだった。
「じゃ、カルちゃんに頼まれたクリスマスパーティまでに戻ってくればいいじゃない。明日にでもアヴィニヨンに行きましょうよ。おうちは市内なの？」
「いいえ、十キロメートルくらい郊外です。でも、泊まるところの心配はしないでください」

バスを降りて、丘の上を目指してゆっくりと登っていると甲高い声が聞こえた。
「レネ、レネじゃない！　まあ、まあ、まあ！」
足を止めて見上げると、丘の上にふくよかな女性の姿が見えた。
「母さん！」
レネが荷物を取り落として、そのまま丘の上までダッシュした。そして、母親と固く抱き合った。ヴィルがレネの荷物を拾って、ゆっくりと丘の上に向かった。三人が親子のもとに着いた時に、二人の興奮はようやく治まった。
「この人たちは……？」
母親の問いに、レネは眼鏡をとって涙を拭き、それから、嬉しそうに言った。
「僕の仲間なんだ。一緒に稼ぎながら旅をしているんだ」
三人はレネの母親を見て微笑んだ。レネにそっくりだった。ただし、ひょろ長いレネと対称的にまんまるだった。優しい笑顔で、突然連絡もなくやってきた一行を迷惑がりもしないで歓迎した。三人は自己紹介したが、レネの母親のシュザンヌは英語が話せなかった。ドイツ語も、もちろん日本語も。だが、そんなことはどうでもいいようだった。レネの生家は、ベージュの壁が優しいイメージの、典型的なプロヴァンスの農家だった。広い庭があり、その先には眠りについた葡萄畑が広がっていた。家の中から、父親もでてきた。こちらは雰囲氣がレネにそっくりのひょろ長い手足の親父さんで、やはり暖かい人柄なのが一目で分かった。満面の笑みで突然帰ってきた息子の頭を小突き、仲間を歓迎した。父親のピエールはブロークンながら英語が話せた。
「もちろん、家に泊まっていってくださいよ。レネ、どのくらいいられるんだ？」
「クリスマスパーティまでにバルセロナに戻んなくちゃ行けないんだ。準備もあるから、そんなに長くはいられないよ。一週間くらいかな」
「そうか。じゃあ、また改めてゆっくり来るんだな。春から夏の方がいいだろうな」
「僕たち、居間かなんかで雑魚寝するから」
そういうレネに母親は厳しい顔で首を振った。
「こんなきれいなお嬢さんを雑魚寝させるなんて、なんてことをいうの？　もちろん客間に泊まってもらうわよ」
「そっちの二人は、マリが使っていた部屋と元のお前の部屋がいいだろう。お前は居間か屋根裏部屋か好きな方を選べ」
「屋根裏は夏はいいけど今は寒いからな。居間にするよ」
「おい、ブラン・ベック。俺は別に個室でなくてもいいんだし、お前の元いた部屋で眠れよ」

「それもいいですね」
「なんだ、レネ。お前、ブラン・ベックなのか」
父親は大笑いした。

シュザンヌは、大はりきりで大きなパイを焼いた。蝶子はレネが突然家に帰りたくなった理由がとてもよくわかった。イネスの手料理とエンパナディーリャは、レネの胃袋を直撃して、暖かい両親のいるこの家への思慕を呼び起こしたのだ。レネの生家はワイン醸造を生業としていたので、四人の酒飲みの襲撃にもびくともしなかった。
「ブラン・ベックったら、失恋の痛手を癒すのになんでコルシカ島なんかに行ったのよ。ここの方がよっぽど効果的じゃない」
蝶子はにやにやして指摘した。
「そうだけど、ここに来ていたら、僕はArtistas callejerosに加われなかったじゃないですか」
レネが言うと稔がレネの頭を小突いた。
「よくやったよ。ブラン・ベック」
ピエールは、皆のグラスにワインを注ぎながら言った。
「旅にでるって話を聞いてから、時折届くハガキ以外、詳細がわからなかったから、心配していたんだぞ。電話ぐらいできるだろう」
「家に電話なんか、誰もしないんだよ。父さん」
レネは少しむくれた。
「いや、したけりゃすればいいじゃないか。俺が連絡しないのは、相手がいないからだよ」
稔が言った。
「ミノルさんとチョウコさんはヨーロッパにお長いんですか？」
ピエールが訊いた。
「俺は四年半です」
「私は七年」
「ああ、日本から一緒にいらしたんじゃないんですね」
「私たち、三人とも偶然同じ時期にコルシカ島にいて、そこでArtistas callejerosを結成したんです」
蝶子がにっこりと笑った。
「父さん。わるいけれど、そんなに質問しないでくれよ。僕たち、あれこれ過去のことを詮索しないって決まりがあるんだ」
レネがあわててフランス語で言った。ピエールは、肩をすくめた。
「まだ、過去のことなんて質問していないよ」

ピエールとシュザンヌには、これまで日本人の知り合いがいなかった。アヴィニヨンですれ違う観光客を見たことがあるだけだった。突然息子が二人も日本人を連れてきたのは事件と言ってもよかった。しかも、ドイツ人も一緒だ。レネと氣の合うドイツ人がこの世に存在するというのは信じられなかった。一般的にドイツ人というのは、みな一様に強引で理詰めで意見を押し付けるので、観光地のフランス人は嫌っていた。レネは、ドイツ人の好きなことが苦手だった。つまり理路整然と意見を戦わせたり、ロボットの如く時間に正確に動いたり、集団で騒いだりするようなことができなかった。だから、子供の頃にはたった一人のドイツ人の友達もできなかった。しかし、このドイツ人とはうまくいっているようだった。ドイツ人と日本人はうまく行くだろう。第二次世界大戦も息がぴったりだったし。でも、レネとは、あ

り得ない組み合わせだ。一時的な仲間ではなく、ずっと一緒にいるようなことまで言っている。レネは一体、どうしたんだ？

けれど、二日ほど経つと、夫婦はレネがこの三人と一緒にいる理由がわかってきた。ブラン・ベックなどと呼ばれながらも嬉しそうにしているのも不思議ではなくなってきた。

レネは子供の頃から周りとうまくコミュニケーションできなかった。ありていに言えば、人が良すぎて簡単に利用されてしまうのだった。誰のことも好きになり、皆からコケにされる。傷つくが、それでも新たに誰かを好きになり、再び使われてしまう。親孝行で優しいが、ふがいないので叱ると、さらに傷ついて見る影もなくしおれてしまう。この三人は、三人とも全く違う個性を持っていた。稔は公正に誠実にレネに接する。けれど上からではなく対等に、楽しく信頼を持って接する。蝶子は本当の蝶のように軽やかにレネをからかって回る。レネの人の良さや隙の多さをちくちくと刺して、それが結果として外部からレネが害を受けるのを防ぐことになっている。そして、無表情で無口なヴィルが、何故かレネを蝶子や外敵から守っているのだ。三人ともレネの知性と優しさを心から尊重しているのがわかる。この三人といると、どれだけレネが心地いいか両親にはよくわかった。パリで、何人もの女や男にコケにされて、クリスマスやイースターの帰郷の度に涙を流していたことを思うと、大道芸人の旅だろうが、レネが離れたがらないのも当然に思えた。

「クリスマスにいられないなら、クリスマスのごちそうを早めに出すか。一週間あれば準備できるだろう？」

ピエールはシュザンヌに言った。彼女は大きく頷いた。明日から準備に入らなくてはならない、と固い決意を見せた。レネは顔を輝かせ、三人は何が始まるのかと顔を見合わせた。

翌日、四人はレネの案内で、アヴィニヨンの街に行った。街の中心には、マルシェ・ド・ノエル（クリスマス市）が立っていた。六十ほどの小さな屋台がところ狭しと並んでいる。レネは母親に頼まれた乾燥果物や砂糖漬けなどを買った。

「プロヴァンスってクリスマスには何を食べるの？」

蝶子が訊いた。クリスマスと言えばイチゴケーキのイメージしかない稔も興味津々だった。

「村によって違うんですよね。海のそばでは魚、マグロとかタラなんかを食べます。でも、うちは内陸部なので魚は食べません。我が家ではシャポンという去勢雄鶏にクルイズというパスタ、それに大蒜とカルドンのベシャメルソースグラタンを食べます。それにブッシュ・ド・ノエルに、十三種類のデザート」

「ケーキの他に、十三種類のデザート？」

稔は耳を疑った。

「キリストと十二使徒を表しているんですよ。この地方の伝統なんです」

どうやら冗談を言っているのではないらしい。

市の真ん中にある噴水は寒さで凍っていた。バルセロナで買ったダウン入りコートが絶対的に必要になっていた。外でフルートを吹くのも三味線を弾くのも厳しい季節になっていた。稔が言っていたように、真冬に外で稼ぐのは事実上不可能だった。大都会の地下鉄ぐらいしか

道はないだろう。カルロスやレネの両親の暖かい歓待があり、暖炉の火にあたりながらワインを飲んで大騒ぎのできる環境がなければ、暖かい家庭に帰る人を見ながら長い冬をしのぐのはとてもつらいことだったに違いない。

「テーブルには、三枚のテーブルクロスをかけます。その上に、三位一体を表す三本のロウソク、ヒイラギの葉と聖バルブの麦を飾ります。カレンドル・パンは中央に置きます。十三種のデザートもテーブルに最初からセットします。テーブルに余白を残しちゃダメなんですよ。豊穣を意味しているんでね」

自家製のワイン、グラスに、お皿が隠れて見えなくなるほどにたくさんのせられる十三種のデザートは、ポンプ・ア・ユイルというオリーブオイルとオレンジの花で風味付けしたパン、白いヌガーと黒いヌガー、四つの托鉢修道会を象徴するくるみ、アーモンド、イチジク、干しブドウ、その他にはヘーゼルナッツ、乾燥なつめ、りんご、オレンジ、メロン、チョコレート。

準備が整った頃に、シュザンヌが大きな雄鶏と、熱々の野菜グラタンをテーブルに持ってきて食卓が整った。ピエールがワインをそれぞれのグラスに注ぎ、二週間ほど早いクリスマス祝いが始まった。

「お前の誕生日も直だからな、一緒に祝ってしまえ」

ピエールはレネにウィンクした。

「え。ブラン・ベック、誕生日十二月なの？　いつ？」

「二十日です」

「そりゃいいや。おめでとう」

稔がグラスを差し出した。全員が口々におめでとうと言いながらグラスを合わせていった。レネは照れていた。

「まだ一週間あるじゃないですか。でも、ありがとう」

「いくつになるの？」

蝶子が訊いた。

「えっと、三十歳です」

「やっぱり年下だったわね。読みが当たったわ」

蝶子は稔にウィンクした。

「ええっ。チョウコさん、二十代の前半じゃないんですか？」

ピエールが驚愕した。

「日本人は若く見えるんだ。お蝶は現役だったろ？ってことは、いま三十二歳だな」

女性に歳を訊かない西洋の遠慮を無視して稔が平然とバラした。蝶子はちっとも氣にしていなかった。

「なったばかりよ」

「誕生日、過ぎちゃったんですか？」

レネが訊いた。

「ええ、十一月十八日」

「わあ、じゃあ、お祝いしなきゃ。おめでとう、パピヨン」

レネの音頭に合わせて、再び乾杯が始まった。

「ヤスは、現役じゃなかったの？」

「俺は一年目は共通一次で落ちたんだ。九月の末に三十三歳になったよ」

「ヴィルさんは？」

ピエールの問いに蝶子と稔は興味津々になった。ヴィルはまったく年齢不詳だったからだ。
「五月生まれで、ブラン・ベックと同じ歳だ」
「ええっ。年下かよ！　一番落ち着いているのに」
稔が言った。
「アジアでは、年下のものは年上のものに服従するのよ。これからはお姉様といって従いなさい」
蝶子が言うと、ヴィルが即座に首を振った。
「俺たちはアジア人じゃないし、ヤスならまだしも、あんたに従うなんてまっぴらだ」
その場の全員が笑った。
　鶏は柔らかくてジューシーだった。熱々の野菜グラタンに、焼きたてのカレンドル・パン。ポール自慢のワインで何度も乾杯し、暖かいクリスマスの雰囲氣が広がった。
　四人はいつも楽しく酒を飲んで騒いでいるが、今夜は特別に楽しかった。特にレネは本当に幸せそうだった。暖かい家庭というものが、どんな贅沢な暮らしにも勝ることを蝶子は実感した。エッシェンドルフの館のクリスマスパーティの食事は、最高の素材を使い、シェフが腕によりをかけたものだった。しかし、蝶子はクリスマスを待ったことなど一度もなかった。
　夕食の後、ムスカの白ワインと一緒にケーキと十三種類のデザートを食べることになった。
「もう入らないよ」
稔が言ったが、ピエールは首を振った。
「ほんの一口でもいいから、全種類を食べなくちゃ。それが伝統なんですよ。これを食べない人には、とっておきのリキュールは出しませんよ」
　全てを締めくくるのが、自家製のラタフィア（果実、植物の花や茎の浸出液から作るリキュール）だった。
　アヴィニョンを去る前に蝶子はどうしても橋の上に行きたいと言った。
「なんてことのない橋ですよ」
レネは言ったが、心なしか誇らしげに率先して案内した。川の半ばで途切れている灰色の石橋を四人は歩いた。それから稔が思いついたように三味線を取り出して『アヴィニョンの橋の上で』を弾いた。ほかの観光客が目を丸くしているのを尻目に、蝶子はレネやヴィルと交互に踊った。川の水分で霜が降りている石畳。足下がつるつるして転びそうになる。それをお互いに抱きとめ合いながら、ぐるぐると踊った。笑い声が満ちた。暖かかったのはダウンコートを着ているせいだけではなかった。

バルセロナ、フェリス　ナビダー

パーティの準備のために、四人は広間をクリスマス風に飾り付けていた。巨大な樅の木に、ありとあらゆる飾りをつけていく。

「いいわねぇ。こういうのって」

四人の中で、クリスマスのいい思い出がたくさんあるのはレネ一人だった。蝶子は実家でぎくしゃくしていたし、クリスマスデートもした事がなかったので、こんなに楽しいクリスマスの雰囲氣は初めてだった。エッシェンドルフ教授の館では毎年盛大なクリスマスのパーティがあったが、堅苦しくて好きになれなかった。稔の生家では伝統を重んじるちゃきちゃきの江戸っ子の父親が馬鹿にするのでクリスマスなぞ祝った事がなかったし、ヨーロッパに来てからはずっと浮浪者同然でそれどころではなかった。ヴィルも両親の揃った暖かくて静かなドイツ伝統のクリスマスを祝った事がなかった。子供の頃は母親と簡単に祝い、ティーンエイジャーの頃は父親のパーティに無理矢理参加させられたが、端に立っているばかりでいい思い出はなかった。今年は四人にとって特別だった。Artistas callejerosを結成して初めてのクリスマスだ。それも、こんな豪華な館で、暖かい暖炉の側で迎える最高の。

蝶子が上機嫌で『樅の木』を鼻歌を歌っている所に、稔は日本語で加わった。その訳は納得がいかないとレネがドイツ語の歌詞で参戦した。それを聴いて、三人は一斉に手を止めてレネを見た。

「な、なんですか。歌詞間違えましたか？」

「ちょっと、ブラン・ベック！　そんないい声しているの、何で隠していたのよ！」

レネは透明で明るい見事なテノールだったのだ。

「え。歌えって言われなかったから……」

「すごいぞ。どこかでトレーニングしていたのか？」

ヴィルも梯子から降りてきた。

「いや、教会の合唱団にはずっと参加していたけれど、でもトレーニングなんてものは……」

ヴィルはピアノの前に座り、『ホワイト・クリスマス』の伴奏を弾き出した。蝶子と稔に顎で促されて、レネはもじもじと歌いだした。惚れ惚れするいい声だった。

「つたく、爪を隠し過ぎだ」

稔がつぶやいた。ヴィルは、蝶子に加わるように言った。蝶子はセクシーなアルトで、自在に下のパートを引き受けた。蝶子に助けてもらってレネは嬉しそうに、もう少し自信を持って歌いだした。

「こりゃ、いいぞ！」

稔も、ギターの腹をドラムがわりに叩いて加わったので、ヴィルは即座に楽しげに転調した。やがて、アンサンブルは愉快なクリスマス・メドレーに変わった。

パーティの当日、午前中は蝶子が台所でイネスを手伝い、男三人は薪や酒の瓶などを広間に運んだりセッティングをしたりして忙しく働いた。もちろん普段からの使用人の他に、この日は多くのヘルプが来ていたが、四人はお客様然として座っているつもりはなかった。夕方になると、ロッコ氏にもらった衣装に着替えた三人と、新調したあ

でやかな曙色のドレスに身を包んだ蝶子は広間でカルロスと早い乾杯をした。
「おお、なんという美しさだろう。マリポーザ。あなたは夜明けの荒野に立ちのぼる金星です」
蝶子の手にキスをするカルロスを見て、稔はどっちらけという顔をした。毎晩、酒を飲んで大騒ぎしている居候への言葉かよ。カルロスはさらに大仰に続けた。
「どうか、この私と一曲ダンスを踊ってくださいませんか？」
「喜んで」
「おい、お蝶、お前ダンスなんか踊れんのかよ」
驚く稔に、蝶子は勝ち誇ったように微笑んだ。
「一通りはね」
　それで、稔はギターで『真珠取りのタンゴ』を弾いてやった。二人は、コンチネンタル・タンゴを華麗に踊った。踊れるというのは嘘じゃないらしい。きちんと習ったようだ。
カルロスは少し驚いて言った。
「見事ですね。もしかしてアルゼンチン・タンゴも踊れるんじゃないんですか？」
「多少は」
蝶子が自信満々のときの婉然とした微笑みを見せた。それで今度はヴィルがピアノの前に座ってピアソラの『ブエノスアイレスの冬』を弾きだした。
　カルロスのリードは見事だった。だが、蝶子も尋常でない上手さだった。おい！　普通の日本人がどうやってアルゼンチン・タンゴなんか習得するんだよ！　稔は目を剥いた。
ヴィルにはちっとも不思議ではなかった。父親のエッシェンドルフ教授はアルゼンチン・タンゴの名手として有名だった。コンチネンタル・タンゴと違い、アルゼンチン・タンゴは男のリードだけでは上手く踊れない。蝶子のステップはそんなに難しいものではなかったが、完全に自分のものにしていた。ステップを踏むたびに、青白い炎が燃え上がる。その妖艶な表情が挑みかけ、切れのある動きの後に完璧なスタイルの脚がねっとりと振りもどる度に、危うさが漂う。いつもの崇拝者とわがままな日本人から、ゆっくりと運命の恋人に変容していく。スペイン語には空氣や雰囲氣をあらわす「アイレ」という言葉がある。それは色氣や粋という意味や、人生の喜びや悲しみを意味することもある。生きている人間の周りにまとわりつく目に見えないがそこにあるもの、蝶子とカルロスを包んでいるのはまぎれもなく情念のアイレだった。稔とレネは息を飲んでその踊りに釘付けになっていた。ヴィルのピアノもまた大きく影響され、音が変わっていく。
「あ、あの〜、ドン・カルロス……」
間延びした声が入り口からして、五人は我に返った。カルロスの秘書のサンチェスが困った表情で立っていた。
「最初の、お客様がいらしたんですが……」
踊っている場合ではなかった。
「乾杯！」
「メリー、クリスマス、には早いかな？」
稔は日付を数えた。まだ三日くらいあるよな。蝶子はキリスト教でな

い日本人らしく答えた。
「別にいいんじゃないの？　クリスマスパーティだし」
「スペイン語ではなんていうんでしょうね？」
レネの問いに、カルロスが答えた。
「フェリス・ナビダー、ですよ」
「じゃあ、フェリス・ナビダー！」
「フェリス・ナビダー！」
次々とグラスが重ねられた。
「カルちゃん、本当にありがとう。私こんなすてきなクリスマス経験したことないの」
「それは光栄ですね。私もあなたたちと祝うことのできる幸せをかみしめていますよ。実を言うと、もう長いことまじめに祈ったことがないんですが、あなたたちと毎年祝うことができるように神に祈ることにしましょう」
カルロスは蝶子の頬にキスをした。蝶子は微笑んでキスを返し、それから、レネ、ヴィルの頬にも順番にキスをした。そういう習慣のない日本人の稔は目を丸くしていたが、蝶子はとても自然に稔の頬にもキスをした。稔はそれがちっとも嫌ではなかった。お蝶も俺もずいぶんガイジン化してきたもんだ。

四人のショーはここでも喝采を浴びた。ショーの後には、カルロスの友人たちがひっきりなしにやってきてはカルロスに紹介を請うた。ミステリアスで美しい蝶子に言い寄りたがる男たちもいたが、カルロスが皆はねつけた。稔はその様子がおかしくてへらへらと笑った。

だが、寄ってきたものの中には悪くない話もいくつかあった。その一つが、ロッコ氏のレストランのスペインバージョンで、マラガ市内に最高級のクラブの開店準備を進めているというカデラス氏の申し出だった。来年の四月のオープニングから一ヶ月ほど、働いてくれないかというのだった。稔は手慣れた様子でギャラの交渉に乗り出し、あっさりと宿泊と食事と酒込みの好条件を手に入れた。年明けにやはりひと月ほど頼みたいと言ってきたのはバルセロナのカタルニャ料理のレストランを持つモンテス氏だった。彼の雇っているピアニストがその時期はメキシコに休暇にいくのだ。稔が泊まるところの交渉をしたらカルロスが割って入り、バルセロナにいる間は宿泊と食事と酒はここ持ちだと言い張った。

稔はこれまでの経験から十二月と一月がもっとも厳しい季節だと知っていたので、この二ヶ月をこの快適な館で過ごせ、年明けからは仕事も暖かい室内でできる、飛び上がって踊りだしたいほどだった。何よりもうれしいクリスマスプレゼントだった。

グラナダ、ザクロの樹

「日本の方ですよね」
アルハンブラ宮殿の前で稼いで、休憩にペットボトルで水を飲んでいると、後ろから声がかかった。蝶子は何かと思って振り向いた。ずっとキャーキャーいって見ていた日本人観光客二人組だった。
「そうだけど？」
「やっぱり。もう一人の男性が三味線だったから、そうじゃないかと思ったんです。あの、お願いがあるんですけど」
「何？」
「あの、金髪の人と一緒の写真を撮りたいんです」
稔は吹きだした。蝶子は眉一つ動かさずにドイツ語でヴィルに声をかけた。
「テデスコ。あなたと一緒に写真を撮りたいんですって」
ヴィルは、これまた眉一つ動かさずに答えた。
「やだね」
蝶子はにっこりと微笑んで日本人観光客に言った。
「ごめんなさいね。彼は写真に撮られるのが嫌いなんですって。勘弁してあげてくれる？」
　拒否されて悲しそうに未練たっぷりに立ち去る日本人二人を、レネは氣の毒そうに、稔はニヤニヤして、そして蝶子とヴィルは無表情に見送った。
「写真撮られるのが嫌いなのかよ、演劇をやってるくせに」
稔は面白がっていった。
「写真が嫌なんじゃない。パンダみたいに扱われるのは氣に入らん」
稔は大笑いした。レネはそれでも日本の女の子たちが氣の毒そうだった。
「心配しないでいいのよ。いい薬になるわ。そうじゃないと、あの子たち、同じような事をあちこちでやるでしょうから」
蝶子は容赦なかった。稔はあらためてヴィルの顔を見た。
「見慣れすぎてあたりまえになっていたけれど、確かに整っているよな。金髪碧眼だし、欠点がなさ過ぎる」
「ヒトラーが大喜びしそうな容姿じゃない？　ＳＳ（親衛隊）の制服を着せたら似合いそうよね」
レネはおろおろした。誉めていないどころかケンカを売っているとしか思えない言い草だ。
ヴィルはぼそっと言った。
「あんただって、典型的なゲイシャ顔じゃないか」
蝶子と稔は顔を見合わせた。
「そりゃ、誤解だよ。欧米人にはこれがオリエンタルな日本美人の典型かもしれないけれど、お蝶は俺たちにとってはどっちかっていうと渡来系だぜ」
「渡来系ってなんですか？」
「大陸から遷ってきた外国人の子孫みたいな顔ってことよ。目が細くて吊り上がっているからでしょ」
「じゃあ、典型的な日本の女の子ってどんな顔なんですか？」
レネが訊いた。稔はあっさりと答えた。
「さっきいた女の子たちみたいな顔だよ」

レネは少しがっかりしたようだった。日本に行ったらパピヨンみたいに神秘的できれいな女性がたくさんいると思ったのに。
「あんたは純粋な日本人じゃないのか？」
ヴィルが訊いた。蝶子は切れ長の目を更に細めて言った。
「あなたがドイツ人であるのとおなじ程度には純粋よ。この顔は隔世遺伝の悪戯なの。両親も妹もこんな顔じゃないもの」
「お前、妹がいるんだ」
稔が訊いた。
「ええ、二つ年下でね。まともなの」
「まともって、どういう意味ですか？」
レネが不思議そうに訊いた。
「フルートなんかやりたがらないで、普通に結婚して、孫の顔を両親に見せたって事よ」
「ついでに大道芸人にもならなかったってことか？」
稔の言葉に蝶子は自虐的な高笑いをした。
「あんたがまともでなくてよかったよ」
ヴィルが無表情に言った。三人はそのらしくない感想に耳を疑ったが、蝶子はさらにらしくない最上級の笑顔を見せた。
「ありがとう」

「こんなにたくさん日本人をみたの久しぶりよね」
蝶子は稔に話しかけた。
「そうだな。バルセロナにもいたけれど、こんなに集中していなかったものな。パリは多かったぞ」
「ヤスもパリにいたことがあるんですか？」
レネが訊いた。
「ああ、四年半くらい前さ。シャンゼリゼとかエッフェル塔の下で稼いだな。でも、大道芸を始めたばっかりだったから、まだおどおどしていた」
「僕の職場と近かったわけですね。あの頃、僕は、シャンゼリゼから徒歩五分のクラブで働いていたんですよ」
「ニアミスだったのね。あの当時にもうArtistas callejerosを結成していたかもしれないってことよね」
蝶子が楽しそうに言った。
「それをいうなら、俺たちはもっと早くに会っているじゃないか」
稔は言った。
「どこで？」
レネは不思議そうに訊いた。
「あれ？　言っていなかったっけ？　俺たち大学で同じソルフェージュのクラスにいたんだ。コルシカ・フェリーの上でこいつを見つけた時にすぐにわかったよ。こいつは俺のこと覚えていなかったみたいだけど」
その不名誉な発言は軽く無視して、蝶子はヴィルに話しかけた。
「テデスコと私もどこかでニアミスしているかもしれないわね。だってアウグスブルグに住んでいたらミュンヘンに来ることもあったでしょう？」
「そうだな」
ヴィルは短く答えたが、本当はニアミスどころではなかった。蝶子は

ヴィルの父親の家にいて、逃げ出していなければ近いうちに未来の母親として紹介される予定だったのだから。

アルハンブラ宮殿だけはどうしても観光したいと言い出したのは蝶子だった。予約制で、時間が来たら集まってツアーとして中に入ることが出来るシステムなので、予約時間の少し前まで稼いでいた。その日は終日曇っていたのだが、四人が宮殿内に入ったのと前後して、雲間から光が射しはじめた。アルハンブラ宮殿にはもちろんステンドグラスのようなものはない。しかし、太陽の光の作り出す陰影がなければ、この類い稀な建物の印象はがらりと変わってしまう。真夏のうだるような暑さの中に来るのも悪くないが、その時期にはタンクトップと短パンの旅行者が新宿の繁華街のごとく溢れ、グラナダが観光客ずれしたつまらない街にみえてしまう。オレンジがたわわに実る冬の終わりのこの時期は、そう考えると世界に誇るこの観光地を観るにはベストシーズンと言ってよかった。第一、四十度を超す真夏と較べて過ごしやすい氣候は、大道芸人たちに優しかった。

王宮の数々のアーチや石柱に施された幾何学模様の漆喰細工は、ため息が出るほど美しかった。周りの観光客たちは必死でシャッターを押していたが、四人はカメラを持っていなかったので、自分の脳裏に焼き付けた。

色々なところに行く。その思い出は、写真やTシャツにして残しておくことは出来ない。だから無駄な観光などしない、忘れたくないものはその瞬間を記憶に留める。それだけだ。けれど、四人がいつも共にいれば、それは共通の思い出となって残る。何年も経ってから、一緒にここに来たことを語り合える、そういう存在であることが今の四人にはとても大切だった。

王宮の中で最も大きな『大使の間』と呼ばれる広間は、様々な国の使節の謁見や、儀式が行われた場所だという。天井から壁、下部のタイル、床に至るまでびっしりと細かなアラベスク模様の装飾とコーランの言葉が刻まれていた。そしてその先に行くと、稔ですら日本で写真をみたことのある有名な『ライオンの中庭』を囲んでハーレムが広がる。

「いいなあ。こんなところで、毎日美女に囲まれて過ごしていたんだ」稔がぽつりと言った。レネは同じ感想を持ったが蝶子の前で言う勇氣がなかったので、黙って小さく頷いた。蝶子が笑い出した。

「馬鹿ね。女の数が増えるほど、問題が倍増するのに」

蝶子が二人になったときの状況を想像して、二人は首をすくめた。確かにそれは勘弁してほしいと稔は思った。

蝶子は噴水の水音に耳を澄ませた。わずかなトレモロ。水に反射する光が遊ぶ。風が緩やかに渡っていく。かつてのハーレムの女たちが見たもの、感じたことに思いを馳せる。彼女たちは平和で幸せな時を過ごしたのだろうか。それとも、主の寵愛をめぐって落ち着かない日々を送っていたのだろうか。私のように逃げ出したものもいるのだろうか。

「ヤス。あとで、『アルハンブラの思い出』を弾いてよ」

稔はまかせとけという顔で頷いた。

宿に戻る前に、近くの市場に買い出しにいき、ザクロを見つけた。

蝶子が嬉しそうに手に取った。
「あら、まだあるのね。秋の果物だからもうないかと思ってたわ」
「これが、おしまいの時期なんでしょうね。せっかくだから買いましょうか」
レネが、オレンジと一緒にしてもらった。ついでに異国情緒たっぷりのアラブ人街の間を楽しみながら歩いていく。
「アンダルシアの中でも特にイスラムの名残を感じることが出来るんですね。イスラム世界に来たみたいです」
レネが言った。稔が同意した。
「けっこう近いんだよな、ヨーロッパと近東って。そのうちにそっちにも足を伸ばすか？」
「ここからアフリカも近いぞ」
ヴィルが言った。
「簡単に行けるの？」
蝶子が興味を示した。
「ジブラルタルやアルヘシラスからは、海の向こうにアフリカ大陸が見えるんだ。渡る先はスペイン領のセウタだから船に乗るのに面倒な手続きもない。行くか？」
「行ってみたいわ。あなたたちは、どう思う？」
蝶子はレネと稔にも訊いた。
「賛成！」
稔が即座に言って、多数決の必要票を投じた。もちろんレネも賛成だった。
「セウタからモロッコに入るなら、フランス語ですからね。僕が役に立ちますよ」
その夜、稔は約束通り、『アルハンブラの思い出』を演奏した。

セウタ、アフリカ大陸

「あ、見える」
本当に海の彼方にうっすらと大陸の片鱗が見えた。あそこはもうアフリカなのだ。レネははしゃいだ。はじめてのアフリカなのだ。
「本当に近いのねぇ」
蝶子も感慨深げに頷いた。アルヘシラスでバスを降りた。大きな看板に従えば、アフリカ行きの船の乗り場はすぐにたどり着けた。チケットを買って、係員に案内されるともう船に乗れた。あっけないほどだった。
「ほら。そこに見えているのがジブラルタルだ」
船が出港してすぐにヴィルが隣に見えている半島を指差した。
「へえ。あそこからは船は出ていないのか？　あっちの方が近かったじゃないか」
稔が訊く。
「あそこはイギリスですからねぇ。スペインからスペインに行く方が何にせよ簡単なんじゃないですか？」
レネが答えた。
「そうか。ジブラルタルって未だにイギリスなんだ」
「周り中スペインで、あそこだけイギリスなんて変な感じね」
蝶子も言った。日本人の二人には、地理上の国と国家としての国というものは一致しているという感覚があった。しかし、世界には、地理的に明らかにある国の一部でも歴史と政治の事情からぽつんと存在する外国があるのだ。いま目にしているのは、そういう『事情のある外国』だった。
「テデスコもブラン・ベックも、ヨーロッパ全般の地理や歴史に詳しいわよねぇ。私、学校で眠っていたのかしら」
蝶子はため息をついた。
「学校で習ったんじゃない。ヨーロッパのことは自然に覚えるさ。俺は極東のことはほとんど知らない」
ヴィルは静かに言った。レネも首を縦に振って同意した。
「スイスのモルコテのことも知っていたし、もしかして、テデスコはこれまでもたくさん旅行していたの？」
蝶子は訊いた。ヴィルは頷いた。
　ヴィルはフルートをやめてから、堰を切ったように旅行をしまくった。週末にスイスやオーストリアに行ったり、休暇でマルタや東欧、ギリシャやトルコにも行った。遠くへ行くことのできるどんな乗り物も好きだった。新しい土地を訪れるのも刺激的だった。レッスンを休んだことをなじられることもなく、窮屈な家庭に戻る必要がないのも嬉しかった。
　道連れはいなくて、いつも一人だった。誰かと行くのが嫌だったというわけではないが、そういう関係の友情を築いたことがなかった。いつも一人だったので、誰かと行くことなど考えたこともなかった。Artistas callejeros の仲間たちと訪れた土地の多くは、既に一度は来たことがあった。だが、それは全く別の経験だった。最初は、大道芸に有利だから一緒にいた三人だった。蝶子が誰だかわかったので、自分の正体を隠してメンバーに加わった Artistas callejeros だったが、もはや当初の目的はどうでもよくなってしまっていた。一緒に仕事を

し、寝食を共にし、それから日常を楽しむ。その関係はヴィルが予想もしていない近さだった。旅で目にするもの、口にするものは、一人の時と全く違っていた。体験もまた、仲間とは切り離せないものになっていた。
「アルヘシラスにも来たことがある。ただ、同じものを見て、同じ空氣を吸っているはずなのに全く違うな。道連れがいるっていうのは、悪くない」
「特に食事の時はそうよね」
蝶子がとても嬉しそうに微笑むと、稔が混ぜっ返した。
「お前がいうのは、酒を飲む時って意味だろ」
「リボルノで誘ってもらえた時は、本当に嬉しかったですねぇ」
レネが感慨深げに言った。
「俺たち、全員がもともとは一人旅していたんだもんな」
稔も頷いた。
「あまり協調性なさそうなメンバーばかりなのにねぇ」
もっとも協調性のない蝶子がそういったので、みな笑った。

船は、ぐんぐん進み、あっという間にヨーロッパよりもアフリカ大陸が近くなった。そして、やがてセウタの港が見えて来た。
「ここがアフリカだとは信じられないな」
港を見回して稔が言った。
「そうね。なぜかしら？」
蝶子は少し考えて、やがて思い当たった。
「白人ばっかりじゃない」
「モロッコやその他の国から、移民が簡単に入ってこないように厳重に国境管理をしているんだ」
ヴィルが事情を説明した。
　それはスペインよりも、もっとヨーロッパ的な町だった。表示がスペイン語で町のあちこちにバルがあるので、やはりスペインなのだと思う。けれど清潔で静かだ。ほかのアンダルシアの町のように、大きなヤシの木が南国らしい軽やかさを醸し出している。しかし、道ばたにプラスティックの買い物袋や缶が打ち捨てられているようなことがなかった。
　坂を上って市街に入ると、植民地時代の建物が建っている。パラドールになっているホテルがあり、その真ん前は大聖堂だった。もう少し町中に入っていくと、細い道が少しだけ迷路のように奥へ導き、そこにはいくつかの安宿が存在した。
「あら、見て。あんなところに中華料理店があるわよ」
「本当だ。中国人って、こんなところまでやってきてたくましく商売するんだなあ」
蝶子と稔が感心して見ていた。
「たまにはアジアの食事がいいんじゃないですか？」
レネが訊いた。蝶子と稔は顔を見合わせた。
「米か。もうどのくらい食っていないかなあ」
「そういわれると、長いこと食べていないわよねぇ」
それを聞いて、ヴィルとレネはさっさとそのレストランに足を向けた。日本人二人は苦笑しながら彼らに続いた。
「ねえ。事情は別として、日本そのものには全くホームシックはない

の？」
チャーハンをよそいながら、蝶子が稔に訊いた。
「あるさ。家族に対するホームシックもあるけれど、それとは全く関係なく日本的なものに突然たまらなくなることがある。発作みたいなもんかな。心臓がきゅっとつかまれるっていうか。でも、発作だから、しばらくすると治まっちゃうけどな。お蝶、お前は？」
稔は青島ビールを注ぎながら訊き返した。
「そうね。そういうことってあるわよね。例えば、蝉の声とか、入道雲なんかに弱いわ」
「いつかは日本に帰りたいと思っているんですか？」
レネがとても心配そうに訊いた。
蝶子は黙り込み、稔はしばらく考えてから答えた。
「難しい質問だな。今は帰りたいなんてことは全く思わないけれど、老人になった時にヨーロッパに俺の居場所があるのかなと思うこともある」
「そうね。でも、そうなったら日本にも居場所がなくなっているのかもしれないわね」
蝶子は遠い目をした。
「でも、そんな先の話はともかくさ。俺、早いうちに日本に連絡を取らなくちゃいけないんだよな」
「どうしてですか？」
「ほら、前にも言ったけど、俺そろそろパスポートを更新しなくちゃいけないんだ」
「あら、じゃあ、私も一緒にやってしまうわ。バルセロナには日本領事館があるもの、マラガの仕事が終わったらバルセロナに行って手続きしましょうよ」
「問題は戸籍謄本なんだよ。どうやって取得して、どこで受け取るかだよな」
「受け取るのは、やっぱりカルちゃんに頼んでコルタドの館に送らせてもらうのが現実的じゃない？」
「ＯＫ。だけど日本では誰に頼めばいいんだ？」
蝶子は考えこんでいた。稔が失踪中で家族に連絡をしたくない上、蝶子も親や妹とは連絡したくなかった。
「マドモワゼル・マヤはどうですか？」
レネが訊いた。Artistas callejerosが訪れたすべての町から葉書を受け取っている真耶のことを、レネは蝶子の大親友だと思っているのだ。そうでないことを知っている稔と蝶子は、真耶に頼むことなど全く考えてもおらず、そのアイデアに驚いて顔を見合わせた。
「そのくらいなら、頼んでもいいか？　電話してみるか」
「そうね。でも、その前にある程度の事情を説明した手紙を書くことにするわ。彼女はすべてを分かっているわけじゃないんだもの」
そういって、蝶子はチリソースのかかった最後の車エビを稔の目前でかっさらった。
「おいっ。トカゲ女。それは俺が狙っていたエビだぞ」
「うかうかしている方が悪いのよ」
「箸を使っていると、僕たち不利ですよ」
レネがふくれっ面をした。
「でも、テデスコはけっこう箸使い上手いじゃないか」

稔が指摘した。
「いまや、ヨーロッパ中にアジアの店はあるからな。箸を使う機会も多くなった。だが、あんたたちとエビを奪い合うようなレベルにはとても達しないだろうな」
ヴィルはどちらかというと食べるよりもビールを飲む方に興味があるようだった。
「ねぇ。ここから、モロッコにも行けるんでしょう？　滞在中に一度行ってみない？」
蝶子は焼きそばを注文してから言った。
「一番簡単なのはツアーに申し込むことだ。ヴィザやら、向こうでの交通やら、面倒なことをみんな省けるからな。長く滞在するつもりなら個人で行く方がいいが」
ヴィルがいうと、稔がもう一本ビールを頼んでから訊いた。
「一日で帰ってくるようなツアーもあるのかな」
「ある。ツアーの数が多いのは、日帰り、二泊、一週間ってところじゃないか」
「明日にでも、旅行会社で申し込んできませんか」
レネも嬉しそうに言った。

　モロッコで稼げるとは思えなかったので、四人は定休日にテトゥアンとタンジェをまわる一日ツアーでモロッコに入ることにした。昼食もついているし、パスポートコントロールもガイドまかせなので何の苦労もいらない。両替の必要すらない。
ものものしい国境でのコントロール、モロッコ側にたむろしている大量の人たち、道の脇に積み上げられたゴミの山などが、全くセウタとは違う世界だった。
「アフリカ大陸に来たって、ようやく納得できたわ」
「セウタは完全にヨーロッパだもんな」
「国境一つでこんなに違うんですね」
バスの窓の向こうに青い空と乾いた大地が広かっている。道行く人たちの服装が、歩き方が、たたずまいが異国的だ。
　やがて、バスはテトゥアンの市内に入り、バザールの入り口で止まった。バザールの中は迷路のように入り組んでいた。白い壁には強い日光が照りつけているが、内部は暗く涼しい。カラフルな衣類や雑多な生活用品を売る店が続く。鍋類が鈴なりに飾られている店、平たいパンを窯で焼く店、それらを楽しそうにのぞきながら、ツアーガイドに連れられて先へと進んでいく。もの憂げな顔の売り娘、偽ロレックスを買わないかともちかけるうろんな男達。ヨーロッパの市場と違うのは、一分でも人々が放っておいてくれないことだ。
　やがてガイドは一行を絨毯屋に連れていった。絨毯を買う氣が全くない四人のにべもない断り方に、ついに販売をあきらめた売り子がほかの客に張り付いてくれたので、その間に四人は他の場所を見て回ることが出てきた。蝶子はレネに通訳してもらって金の縁取りのあるティーグラスを四つ買った。
「そんなもん、どうするんだ？」
稔が訊いた。
「移動する時に、いつもワインをプラスチックで飲んでいるでしょう？　ちゃんとしたワイングラスは難しいけれど、せめてガラスで飲

みたくって」
「悪くないな。白ワインをこういうグラスで飲むこともあるからな」
ヴィルが言った。
「だから、四つ買ったの。いつ割れちゃうかわからないけれどね」
蝶子はウィンクした。
昼食は大きなタジン鍋に入ったクスクスと鶏と野菜のシチューで、すばらしい装飾のある大きなホールの真ん中では、ベリーダンスを踊る女性達がいる。レネはぼうっと嬉しそうにダンスを眺め、稔はクスクスにがっつき、ヴィルは観光客用のビールを遠慮なく飲んでいた。蝶子は遠慮してミントティーを頼んだものの、その甘さにうんざりしてすぐにヴィルと同じくビールに逃げた。
「モロッコで稼ぐことにしなくてよかったわね」
ビールの味に眉をひそめて蝶子が言った。イスラム国ではワインなんて絶対に飲めないし、ビールがあるのも観光客向けのレストランだけだ。
「そうだな」
ヴィルもスペインのセルベッサ（ビール）の味が恋しそうだった。
香辛料屋に連れて行かれ、それからバスに乗ってタンジェに行った。白い植民地時代の建物の残る港から海をのぞむ。
「なぜか、物悲しいわね。昨日見たのとおなじ海なのに」
蝶子が言った。その通りだった。同じスペインに面した海を見ているのに、なぜかセウタで見た海とタンジェで見る海は全く違って見える。周りの人々、ほこりっぽい土地、空氣の匂い、それらがなんともいえない哀調を呼び起こしている。
帰りのバスから観る海に沈む橙色の太陽は、そのメランコリーをさらに強めた。四人は黙って海に消えてゆく夕日を眺めていた。
セウタに戻ると、沈んだ心を高揚させるべく、バルに入ってティントを頼んだ。先程モロッコにいたのが嘘のように、セウタは完膚なきまでのヨーロッパだった。蝶子は買ったティーグラスを取り出して眺めた。やはり、モロッコに行ったのは夢ではなかったのだ。

セビリヤ、蛇

カルロスの別荘はセビリヤの繁華街から近いものの、静かな一角にあった。四人は、言われた通りに、それぞれの部屋を決め、そこに一週間ほど滞在することにした。ドミトリーに泊まる時にはなかなかできない、昼間は稼ぎ、夜は騒ぐバルセロナ式生活パターンをここでも続けることができるのは有り難かった。

ドアが開いた。最初に目を向けたのはヴィルだった。それから他の三人も騒ぐのをやめてドアの方を見た。女が立っていた。ただの女ではない。ものすごい美女だった。緩やかにウェーブする豊かな黒髪を派手なスカーフで留めている。小さい顔の中で、すぐに目がいくのは、緑色のギラギラした瞳だった。それに真っ赤に縁取られた薄く形のいい唇に、完璧な弓形の眉。女優も真っ青の美人だ。スカーフと同じ絹の多彩なドレスをまとい、真っ赤なハイヒールは九センチだろう。

「¿Quiénes son ustedes?」

スペイン語で言われても、答えられる人間はいない。それを察して、女は英語に切り替えた。

「あなたたち、いったい誰？」

「コルタドさんの許可をもらって滞在しているものですが」

稔が答えた。

「ああ、そうなの。カルロス、私が時々使うって言っていなかった？」

女は言った。

「いいえ。何も聞いていませんが」

一番ドアの近くにいた蝶子が立ち上がって言った。急に空氣が変わった。二人の女が一瞬にしてお互いに反感を持ったのを、男三人は感じ取った。

「げ。ハブとマングース……」

稔はつい日本語でつぶやいて、振り向いた蝶子に睨まれた。

女は蝶子を無視して、その横を通り抜け、ぽーっとしているレネの前まで来るとにっこりと笑って手を差し出した。

「私は、エスメラルダ。私のことはカルロスに訊いて。今夜はここに泊まるから」

レネは反射的にその手に口づけをしてしまい、蝶子の視線を避けてうつむいた。エスメラルダは同じことをヴィルにもさせようとしたが、ドイツ人は女の美しさに全く感銘を受けた様子を見せずに無表情のまま頷いただけだった。当ての外れた女は、さらに勝手の違いそうな稔には、自分の神通力を試そうとはしなかった。

エスメラルダは、カップボードから、バカラのグラスを取ってくると、レネに微笑みかけた。蝶子の冷たい視線に戸惑いながらも、レネはおとなしくリオハのティントをそのグラスに注いだ。

「ありがとう」

一息に飲み干すとグラスをその場に置いて、冷やかすように蝶子を見ながら、香水の匂いをまき散らしてエスメラルダは居間を出て行った。そして、階段を上がると慣れた様子で奥の部屋に入っていった。

稔はにやにやと笑った。蝶子はきっとなって言った。

「何が面白いのよ」

「お前とあの女の戦い。実に興味深い」

「なによ。ブラン・ベックったら鼻の下伸ばしちゃって」

レネは赤くなって頭をかいた。
「このまま騒ぎ続けていいのか？」
ヴィルが言った。稔は、電話を取った。
「何かあったら、電話しろってギョロ目が言ったんだ。してみるか」
「えっ。エスメラルダが、そこに……」
電話の向こうでカルロスが絶句した。
「鍵を開けて普通に入ってきて、慣れた様子で部屋に行ったし、あんたとも親しげだったから特に断らなかったけど、まずかったのか？」
稔は困惑した。
「いや、本来はそんな簡単に出入りされちゃ困るんですが、まあ、今夜追い出すというのも剣呑なんで……。どちらにしても私は明日そちらに向かう予定ですから、朝に会ったらそう伝えてください。それを聞いたら逃げ出すかもしれないな」
カルロスは言った。
「なあ、ギョロ目、あれ、誰なんだ？　あんたの親戚？」
稔が畳み掛けた。
「離婚した妻ですよ」
カルロスが答えた。
　電話を切った稔にそれを聞かされた三人も絶句した。あれが、イネスさんの言っていた「結婚にはもうこりごり」か……。
「氣を遣う必要はないそうだ。好きなだけ騒ぎ続けろってさ」
稔はそういったが、なんとなくその夜の四人は静かになった。とはいえ、いつも通り真夜中まで飲んでいたが。

　四人が朝食を食べていると、水色の透け透けのナイトガウンを着たまま、さも眠そうにエスメラルダが降りてきた。
「あんな遅くまで起きていたのに、もう起きたわけ？」
ちょうど胸の谷間が見えるようなポーズをして、赤くなるレネの隣に座ると、妖艶に笑いかけて
「私にもコーヒーをいれてくれる？」
　ニヤニヤ笑う稔と冷たい蝶子の視線を避けるようにしながら、レネは美女の言うままにコーヒーをカップに注ぎ、さらに言われていないのに皿やカトラリーまで用意してやった。
「それで。あなたの名前を教えてくれないの？」
エスメラルダはレネが自分の魔力の支配から逃れないようにその瞳を捉えて言った。
「レネです」
「それから、お友達の名前は？」
「俺は稔だ。こっちが蝶子で、そっちはヴィル」
これ以上、かわいそうなレネが蝶子に睨まれないように、稔が助け舟を出した。
「あんた、ギョロ目の別れた奥さんなんだって？　あいつに会いにきたのか？」
エスメラルダはけたけた笑った。
「ギョロ目ですって。あなたいい度胸しているわね。いいえ。私は彼に会いにきたわけじゃないわ。彼はバルセロナでしょ。私はセビリヤに来る時にはいつもここに泊まるっていうだけ。でも、彼が私に会い

たいなら、別に会ってあげてもいいのよ。結局のところ、彼はまだ私に夢中みたいだから」
それから、ヴィルの方に向き直り、まさにエメラルドのように瞳を輝かせて言った。
「それで、あなたたちは何者なの？　どうして、カルロスの別荘に泊まっているわけ？」
ヴィルは稔とレネが感心するほどの完全な無表情のまま短く返答した。
「俺たちは大道芸人のグループで、よくセニョール・コルタドの世話になっているんだ」
　いつもと様子が違う。エスメラルダはイライラした。普段ならエスメラルダが登場するだけで、場にいる男のほぼ全員が彼女を求めて競争を始めるのだ。そして、エスメラルダはその場を自分の自由に操れるはずだった。いつも通りにいくのは、このひょろ長いフランス人だけじゃない。何を言ってもにやにやしているだけの日本人男と、この私と田舎のおばさんの違いもわからないみたいなこのドイツ人、それにだんだん得意げな顔に変わってきた腹の立つ日本女。なんでカルロスがこんな奴らの世話なんかしているのかしら。
「そろそろ時間よ」
蝶子が計ったらマイナス五十度ぐらいじゃないかと思われる冷たさで言って、皿をシンクに運び出した。
　ヴィルは黙って自分とレネの使った皿をシンクに運び、蝶子の洗っていく皿を隣で拭き、稔はそれを棚にしまった。それから三人は出かける準備を済ませた。レネは自分も席を立とうとするのだが、その度にエスメラルダに話しかけられて、機を逸していた。
世話のかかるヤツだな。稔がテーブルに行って、レネを羽交い締めにして立たせながら言った。
「悪いな。俺たちこれから仕事なんだ。お楽しみは、前のダンナとやってくれ。直にここに来るらしいから」
「なんですって？」
稔はレネを押し出すように玄関に向かわせるとにやりと笑いながら食堂の扉を閉めた。
「ブラン・ベック、あなたったら本当に美女に弱いんだから」
　蝶子はすでに怒っているというよりは呆れていた。レネは少々恥じて、不可抗力だということを立証するために稔とヴィルを見た。ヴィルはエスメラルダに目や鼻が付いていたかも覚えていないといわんばかりだったので、稔の方に助けを求めるように言った。
「ヤスは、なんともないんですか？　あの目に見つめられても」
稔は首を振って言った。
「ありゃあ、女としては、俺の一番苦手なタイプだ。お蝶どころじゃないよ」
「トカゲよりひどいのか」
ヴィルが珍しく楽しそうに訊いた。といっても、三人以外にはいつもの無表情にしか見えない程度の違いだったが。
「ありゃ、コブラだ」
稔の返事を聞いて蝶子は吹き出した。それから不思議そうにヴィルに訊いた。

「テデスコはどうなの？」
「何が」
「あの女よ」
「美人だし、セクシーだな。ベッドで楽しむにはやぶさかではないな」
「えっ。そう思っているようには見えなかったぞ」
稔がいうと、他の二人も頷いた。ヴィルは肩をすくめた。
「あの女は、俺たちを支配しようとしていた。俺はそういうことをされるのが嫌いなんだ」
「なるほどね。あの女はゲルマン人へのアプローチ方法を変えるべきだな」
稔が笑った。
蝶子はヴィルに敬意を持った。支配に屈しない、それは蝶子ができなかったことだった。五年もの間、自分を支配し続けたエッシェンドルフ教授に対するたった一つの反抗は、彼のもとから失踪することだった。はじめから、きっぱりと教授を拒否できていれば、もっと早くに自由でいられたかもしれないのに。もちろん蝶子は知らなかった。ヴィル自身が人生の大半を教授に支配され、やはり蝶子と同じ方法で自由になったことなど。結局のところ蝶子のエスメラルダに対する激しい反感と、ヴィルの彼女に対する冷たい拒否は同じ根からきているのだった。

氣温もかなり上がってきて、二月の終わりだというのに二十度近くあった。青い空とヒラルダの塔をバックにたわわに実るオレンジの木が南国であることを実感させてくれる。アンダルシアはもう春なのだ。大聖堂の近くはにぎわっていて、なかなか稼ぎがいがあった。
「マリポーザ！」
一休みしていると、カルロスの声がした。
「カルちゃん！　早かったじゃない。まだ午前中よ」
「一本、飛行機を早めたんですよ。会議は午後からですが、その前にあなたたちを捕まえたくてね」
「あんた、嫁に会ったのか？」
稔が訊いた。
「前妻です」
カルロスが訂正した。それから、首を振った。
「まだですよ。別に会いたくもないんですが。あなたたちは、午後もここで稼ぐんですか？」
「そうするつもりよ。カルちゃんの会議が終わったら、どこかで合流する？」
「そうですね。ここか、この辺りの店にいてください。私のよく行くタブラオを予約しておきます」
去っていくカルロスの後ろ姿を見ながら、稔はつぶやいた。
「コブラはまだ未練があるっていってなかったか？」
「会うと、ぼうっとなっちゃうんじゃないんですか」
レネが言った。
「ブラン・ベックが言うと説得力あるわね」
蝶子が笑った。コブラとトカゲを並べたら、ギョロ目はどっちを崇拝するんだろう。稔はそのシーンを思い浮かべてニヤついた。

そのタブラオには、もちろん観光客がいた。しかし、バスで大挙して押し寄せるような観光客ずれはしていなかった。それで、カルロスは外国からの客をセビリヤで接待する時にはよくここを使うのだった。ダンサーの元締めのマリア＝ニエヴェスは六十五歳になるダンサーとしては盛りの過ぎたヒターナ（ジプシー女）だが、眼力と腕の動きだけは、若いダンサーが束になっても敵わない。実生活では、ジプシーたちの大いなる母として機能し、女としてはもちろん未だに現役だった。若かりし頃のカルロスに女の愉しみ方を教えたのもこの女だった。

カルロスがエスメラルダと婚約してこのタブラオにつれてきた時に、マリア＝ニエヴェスは頭を振って言ったものだ。

「カルロス。あんたには女のことを、もう少しちゃんと教えたものだと思っていたよ」

カルロスは、ヒターナが美しいエスメラルダに妬いているのだと取り合わなかった。

「ああいう女とは、いくらでも寝るがいい。しかし、結婚なんかしちゃダメだ。やめられないなら、これだけは覚えておきなさい。あんたは骨の髄まで絞りとられて、ダメにされるよ。憎んで離婚できたら大したものだ。ドン・ホセにならないように、それだけは心しなさい」

カルロスとエスメラルダの結婚生活はそれでも八年ほど続いた。怒号と嫉妬と愛欲のループを永遠のごとく繰り返し、カルロスの身代が傾きかけ、それ以上に精神の崖っぷちまで追いつめられ、カルロスは一人でこのタブラオを訪れ、ようやくヒターナの忠告が正しかったことを認めた。そこで彼はようやく自己を取り戻し、なんとか妻から免れることができたのだ。マリア＝ニエヴェスが単なる精神的な支えだけではなく、なんらかのジプシーの魔術を使って離婚にこぎ着けさせたと噂するものもあったが、真偽のほどは確かではない。しかし、カルロスがこのジプシー女にただの接待先の女主人以上の恩義を感じているのは確からしい。

カルロスが Artistas callejeros の四人を連れて行くと、マリア＝ニエヴェスの娘婿であるミゲルは五人をすぐに上席に連れて行った。その席は、踊り手たちが出入りする入り口に近いけれど、舞台がどこよりもよく見え、そして、ただの観光客とは違う上等のタパスや酒が優先的に出てくるのだった。そして、ミゲルが中に引っ込むと直に、女主人が自ら出てきた。

「おや。毛色の違う連中を連れてきたんだね」

ヒターナはさも面白そうに四人を見つめた。カルロスが連れてくる海外からの経済人たちは、ジプシー女には大して興味をそそられないことが多かった。最初に興味を持ったのは、ギターを手にした稔だった。

「何か弾いてみておくれ」

ぶしつけに命じたのでカルロスは驚いたが、稔はフラメンコギターに興味があったので、喜んで短く『ベサメ・ムーチョ』を弾いた。もちろんフラメンコギター風ではなく、自分の慣れているようにではあったが。ジプシー女はじっと聴いていたが、満足したようだった。

「フラメンコギターの技法に興味があるかい」

「もちろん」

稔が言うと、女はミゲルを呼んだ。娘婿は自分のギターを持ってきた。

「同じ曲を弾いてやりな」

ミゲルは『ベサメ・ムーチョ』をフラメンコギターの技法で弾いた。稔は真剣にそれを聴いていた。やがて、同じように加わりだした。ミゲルは、稔に次々と新しい曲を教えた。稔は、熱心にその技法を追い、新しい技術をどんどんと吸収していった。
その間に、ジプシー女の興味は蝶子に移った。
「中国人かい」
女はカルロスに訊いた。
「いや、日本人です。あのギター弾きと同じで」
「おや。日本人には珍しいタイプだね。あんたが新しく夢中になっている女ってわけだね」
「まあ、そうですね。残念ながら、今のところパトロン化しているだけなんですが」
カルロスはあっさりと言った。
「あんたの趣味はわかっているよ。だが、この女にも氣をつけなさい。あの女のような邪悪さはないが、特別な女だ。巻き込まれると火傷をするよ」
首を傾げるカルロスにマリア＝ニエヴェスは続けた。
「光だけの人間はいない。だが、光のあたらない部分が多いと、ドゥェンデの炎が暗闇の中から勝手に燃えだす。この女は己の中にも、男の中にもそうした予期せぬ運命の火を生むタイプだよ。私の娘がこの女の半分もこの性質を持っていれば、さぞいい踊り手になるだろうに」
ジプシー女はため息をついた。カルロスはミゲルの妻であるマヌエラが朗らかでかわいらしい善良タイプであったのを思い出して笑った。ヒターナは蝶子を氣に入っているのだ。
「マリポーザはやはり芸術家です。フルートを吹くんですよ」
「そっちの金髪男は？」
「パントマイマーですが、やはり卓越したピアニストです」
「ゲルマン人には珍しく、ドゥエンデのあるタイプだね。いい音を出すのは聴かなくてもわかるよ。こっちの毛色の違う男は音楽家じゃないだろう？」
今度はレネの方を見て品定めをした。
「違います。手品師です。趣味のカード占いの腕は大したものときいています」
「おや、そうかい。それでも、自分のことは見えないだろうから、女に氣をつけるようにいってやりなさい」
スペイン語のわからない三人にも、品定めされているのはよくわかった。しかし、カルロスが特に目立った反応もしていなかったので、通訳してもらわないままで構わなかった。
いずれにしても、ジプシー女は四人がたいそう氣に入ったらしかった。
やがて、少しずつ客が入りだし、フラメンコショーが始まった。稔は、ショーの間中、空氣でできたギターを抱えてミゲルの奏でる音とリズムを体得しようとしていた。蝶子はマヌエラや他のダンサーたちの踊りを楽しんでいた。だが、一番感心したのは、マリア＝ニエヴェスと卓越した中年のダンサーによる踊りだった。激しい動きなどは何もないのに、ギターと歌と手拍子に合わせて、二人はゆっくりと絡み合い激しい恋に落ちていく様を演じてみせる。肉感的な美しいマヌエラにぽうっとなっていたレネも、ワインを楽しみ踊りには大して興味

がなさそうだったヴィルも、次第にその踊りに引き込まれていった。
　ヴィルがその二人に重ねていたのは、クリスマスパーティの日の蝶子とカルロスのアルゼンチン・タンゴだった。同じ種類のアイレがそこにはある。今、踊っている二人に実生活でどのような関係があるかはわからない。ただの舞踊上のパートナーに過ぎないのかもしれない。しかし、踊るその瞬間には、実生活のパートナーや恋愛関係をすべて排除して、二人の間だけに火が熾る。時には、その火が実世界に飛び火することもあるだろう。多くのドラマがそうして生まれたはずだ。手拍子と、ギターと歌も、次第に踊り手の火に巻き込まれていく。ちょうど、あの日のヴィルのピアノが二人の踊りに強く影響されたように。

　真夜中近くに、カルロスの別荘に戻ると、居間にはエスメラルダと若い男がいた。
「ここで何をしているのか、説明してもらえませんかね」
カルロスは、招かれざる客である前妻と、さらに招かれざる客である見知らぬ男に言った。
「退屈していたのよ。私、待たされるのは嫌いなの。知っているでしょう、カルロス」
「あなたとここで再会する約束をした覚えはありませんね。だいたい、何故ここの鍵をあなたが持っているんですか」
「私はどの別荘の鍵もまだ持っているわよ。私の荷物もまだ残っているし。私は私が好きな時にここを使うわ」
「あなたにその権利がもうないことは、認識していないんですか」
エスメラルダは、若い男を完全に無視して、カルロスに近づいてきた。オレンジ色と黒の鮮やかなワンピースが、優美なネコ科の動物のような動きに華やかさを添えている。緑色の目がギラギラと輝いている。うげ。コブラが鎌首をもたげているぞ。稔はぞくぞくとした。カルロスの近く、顔に息がかかるほどまでに寄り、赤いマニュキアのつややかな爪をカルロスのネクタイに這わせて下から上目遣いに覗き、低い声で言った。
「私に何かを禁じるなんてことは、あなたにはできない。そうでしょう？」
　カルロスは息を飲んだ。エスメラルダは勝利を確信して微笑んだ。しかし、その時、その空氣が壊れた。くすくす笑いが響いたのだ。笑っているのは稔と蝶子だった。あまりにも絵に描いたような悪女ぶりに我慢できなくなったのだ。エスメラルダに魅せられていたレネは怪訝な顔をし、ヴィルには何がおかしいのか理解できなかった。けれど、日本人二人には、この絵柄はギャグだった。
　笑い声が響いたことで、カルロスは呪縛から解かれた。彼はあえて英語でエスメラルダに話しかけた。
「その若いお友達と一緒に、出て行ってくれませんか。はっきりさせておきましょう。あなたと私は完全に終わったんです。それはあなたも望んだことでしょう」
「私は自分の好きなようにするわ。カルロス、まさかあなた、この私よりもその日本人女の方がいいなんていうんじゃないでしょうね」
「あなたと比較するなんてマリポーザへの冒涜です」
そうか？　トカゲとヘビの比較は俺もするけど。稔は小声の日本語でちゃかして、蝶子につねられた。

エスメラルダは、スペイン語で若い男に何か短く言うと、一行をきっと睨みつけながら、ものすごい勢いで出て行った。やがて表に停めてあったフェラーリが爆音を響かせて去っていった。
「マフラー壊れているんじゃないのか、あの車？」
稔がのんびりと言った。カルロスは大きく息をついて、稔に笑いかけた。
「助かりましたよ。あの女がどうにも出来ないのはヤス君がはじめてじゃないのかな」
稔は肩をすくめた。
「俺は、どっちかというと、今日の婆さんの娘みたいな女が好みでね」
「マヌエリータですか。確かにいい女ですが、やめておいた方がいいでしょうね」
「なぜ？」
「ミゲルはたいそう嫉妬深くてね。もう何人も怪我をしているんですよ」
蝶子が吹き出した。

カルロスは、マリア＝ニエヴェスの忠告を伝えるのをすっかり忘れていた。いつも四人が一緒にいるので油断していたのかもしれない。また、あれだけ恥をかかされたのに、再び前妻が別荘にやってくるとは思ってもいなかったこともある。
エスメラルダの面の皮は厚かった。意地になっていたのかもしれない。翌日四人が戻ってくると、またしても居間に陣取っていた。
「カルロスはどこ？」
「バロセロナに帰ったよ。あんた、昨日ギョロ目に言われたことを聞いていなかったのか？」
稔が呆れて言った。
「なんのこと？」
「ギョロ目はあんたがここを自宅のように使うことに同意していないじゃないか」
「そう？　でも、私は、ここが好きなの。どっちにしてもあなたに命令される筋合いはないのよ」
「そんなにカルちゃんが好きなら、どうして離婚したわけ？」
蝶子が意地悪く訊いた。エスメラルダの目が吊り上がった。よりにもよってこの女にそんなことを言われるなんて。
「誰が、誰を好きですって？」
二人の間だけ空間が歪んでいるようだった。稔は首をすくめた。くわばわくわばら。なぜこの手の女たちってのはこうなんだよ。
稔の観察によれば、少なくともこれはカルロスの愛をめぐる戦いではなかった。蝶子はカルロスになついていたが、それは明らかに恋愛関係とは無縁だった。その判断は妙といってもいいかもしれない。バルセロナの館では、蝶子は何度もカルロスと二人で部屋にこもっていた。つまり二人には少なくとも『外泊』に相当する程度の男女関係があると稔は見ていた。それでいながら、蝶子はカルロスに対して恋愛感情を持ち合わせているようには見えなかった。むしろ Artistas callejeros のメンバーに対するような感情に近いと判断していた。その二つは本来相容れないものだった。蝶子の人間関係には、例のハードディスクのたとえでいうところの『重要書類』と『どうでもいい書

類』しかなかったはずだった。そして『重要書類』とは一切ややこしい関係にならないと決めているようだった。しかし、カルロスだけはその中間にいるようだ。そんな複雑なことが可能なんだろうか？　恋愛感情なしに体だけの関係を持ちつつ、固い信頼関係を築くなんて。この前妻だって、カルロスに未練があるようには見えなかった。カルロスの持つ物質的な贅沢に対する未練は大いにあるようだったが。もしかすると、これはカルロスの物質的な寵愛をめぐる、女同士の戦いなのかもしれない。そうだとしたら、ギョロ目はかわいそうな男だな。稔は考えた。

エスメラルダは短い沈黙を破った。

「はっきりさせておくわ。私が彼に我慢ならなくなったの。私のような女は束縛されるのがたまらないの。それに程度の低い女に侮辱されるのもね」

「そう？　あなたの行動は、そんなふうには見えないわ」

蝶子は興味を失ったように言った。

エスメラルダは本氣になった。つまり、この日本女の鼻っ柱を折ってやると、固く決意したのだった。エスメラルダのような女にとって一番の屈辱とは取り巻きの男たちを取られることであった。それで、コブラ女はなんとしてでも蝶子の周りの三人の男を自分に膝まづかせてやろうと決意したのだ。

エスメラルダが彼女の部屋と決めている豪華な寝室に消えたので、四人はこの変な対決は終わったものだと思っていた。いつものように夜更けまで飲んでいたが、やがて就寝した。

「おはよう」

蝶子が食堂に入ってきた時、ヴィルと稔が妙な顔で迎えた。

「おはよう、どうしたの？」

蝶子は二人の顔を見比べながら訊いた。稔が首を傾げながら答えた。

「ブラン・ベックがいないんだ」

「いないってどういうこと？　まだ寝ているんじゃなくて？」

「朝起きたら、あいつの寝ていた部屋のドアが開いていて、ベッドは空だった」

稔の言葉に蝶子は目を白黒した。

「あんな遅くに、もしくは早朝に出かけたってこと？」

「外出用の靴は残っている」

ヴィルが短く補足した。蝶子は食堂を出て、階段の上のエスメラルダの使っている部屋の方を見た。ドアは閉じられたままだ。いずれにしてもあの女はそんなに早くは起きてこない。

「そういうことだと思う」

稔が後ろから付いてきて腕を組んだ。

「やるわね、あの女」

蝶子は笑った。

「笑い事じゃない」

ヴィルが言った。

「心配しているの？　ブラン・ベックはティーンエイジャーじゃないわ」

「だが、あんたみたいに恋愛慣れしているわけじゃないだろう」

蝶子は肩をすくめて食堂に戻った。

「朝食、食べましょう。で、ブラン・ベックが来たら、次の行き先についてみんなで話をすればいいんじゃない？」
　三人が一致すれば、多数決は成立する。つまりすぐにでもブラン・ベックをセビリヤから引き離すことが可能だった。
「さあな。俺はまずはあいつがどうしたいか、訊いてみたいよ」
稔が食堂の入り口を見ながら言った。
　いつもの出かける時間を三十分過ぎても、階段の上の部屋のドアは閉じられたままだった。それで、三人は諦めて三人で大聖堂前に行った。仕事をしていれば、そのうちにレネが来るだろうと思ったのだ。レネは、実際に昼近くにやってきた。皮肉を言うのもためらわれるほどうなだれていているので、稔は何も言わずに手品を始めるようにと合図をした。それから一時間ほど稼いでから、全員で広場前のバルに食事に入った。
　レネは食欲がないらしく、飲み物しか注文しなかった。
　ヴィルがレネの好きなオリーブを差し出してやると、楊枝に刺したままばらく手にしていたが、やがて眼鏡を取って腕で目を拭った。パン・タパスをかじっていた稔も、ティント・デ・ベラーノを飲んでいた蝶子も、手を止めた。ヴィルがセルベッサのグラスを押しやって、珍しく最初の口を切った。
「どうした」
「僕、馬鹿だなって……」
蝶子は賢明にも発言を控えた。ただし、彼女にしては優しい表情でレネを見ていた。稔が静かに言った。
「お前、すぐにでもセビリヤから離れたいか？　それともう少しここにいたいのか？」
　レネはしばらく下を向いて黙っていたが、やがて再び目を拭うと、顔を上げた。心配する蝶子と目が合った。彼女が全く怒っているように見えなかったので、まずはほっとした。
「僕、どうしたらいいか、わからないんです。この前から、ずっとそうなんです。あの人が来ると、他には何も考えられなくなってしまって、でも、あの人はいとも簡単にいなくなってしまう。そうなるとほっとするのに、どこかでずっと待っているんです」
　蝶子は、そういう支配に覚えがあった。エッシェンドルフ教授のレッスン内容がお世辞にも純粋なフルートのレッスンとはいえなくなった時に、蝶子ははっきりと断ることができなかった。それどころか蝶子は次のレッスンを待ち望んでいた。やがて教授は蝶子に下宿を引き払って館に遷ってくるように命じた。蝶子はそれに逆らわなかった。週に一度のレッスン時間はあまりにも短かった。蝶子は、フルートのレッスンを邪魔されたくなかった。しかし、その時間に代わりに行われている教授の別レッスンはもっと頻繁にしてほしかった。
「あの人が僕に興味がないのなんかわかり切っています。ヤスとテデスコが簡単にはいかないので、僕にとっかかりを求めているんだってことも」
　けれど、レネはエスメラルダに恋をしてしまっているのだった。蝶子への憧れや、今までぼうっとなった多くの女性たちとはわけが違った。パリでつきあっていたアシスタントのジョセフィーヌとも全く違った。彼女たちは意思の力でレネを狂わそうとしたりなどしなかった。それが可能なわけでもなかった。
「行き先の候補はある？」

蝶子が静かに言った。レネが自ら決められないならば、仲間が決定してもいいだろう。時に人は誰かに行動を決定してもらいたいものなのだ。特に、こういう状況の時には。ヴィルも蝶子と同じ考えだったので具体的に答えた。
「三十キロくらい先に、カルモナという小さい城下町がある。一度行ってみたいと思っていた」
レネがセビリヤに舞い戻ろうとすればできなくはない距離だが、近すぎもしない絶妙な立地だった。
「なら、私もそこに行ってみたいわ」
「OK。三票目だ。これで決まりだな。夕方のバスに間に合うように荷造りだ」
稔が言った。レネはだまって頷いた。

「何をしているの」
居間で荷づくりしているヴィルの後ろからきつい香水の香りが漂ってきた。女の腕が蔦のようにヴィルの周りに絡み付いた。ヴィルは嫌悪感を覚えたので自分で驚いた。
「抱きつく相手を間違っているぞ」
「いいえ。私は今、あなたに問いかけているのよ」
女は豊かな胸をヴィルの背に押し付けた。
「あんたはそんなことまでしなくちゃいけないほど、シュメッタリングにプライドを傷つけられたってわけか」
折しも居間に自分の荷物を運んできた蝶子が、その光景を見て立ち止まった。まあ、テデスコったら、この状況でも冷静だこと。さすがSのお仲間ね。エスメラルダはまだ自信たっぷりだった。
「そうでもないわ。でも、あなたまでが私に夢中と知ったら、そこの女性はさぞショックでしょうね」
ヴィルは振り向いて蝶子がそこにいるのを見た。その振り向いた顔にエスメラルダが顔を近づけてまともにキスをした。蝶子は興味津々でそのまま見ていた。エスメラルダの行為ではなく、蝶子の物見高い冷静な態度がヴィルをいらつかせた。珍しく手荒に女を振りほどくと、口紅の付いた唇を拭いながら、荷物を持って、入ってきた稔とすれ違い様に玄関の方へ出て行った。蝶子は笑った。
「馬鹿ね。あれはテデスコに対する最悪のアプローチよ。他のドイツ人でもっと練習した方がいいんじゃないの？」
逆上したエスメラルダが近づいてきて、男たちへの誘惑よりも、もっとしたかったことを実行に移した。つまり蝶子に平手打ちを食わせようとした。稔がそのエスメラルダの手を捉えてねじり、簡単に地面に突き倒した。稔はヴィルと違って、女性に対する礼儀などという概念は全く持ち合わせていなかったのだ。倒れた女を軽蔑したさまで見下ろすと、階段の方に向かって怒鳴った。
「さあ、行くぞ。ブラン・ベック。早くしろ」
それから蝶子の肩を抱いてにやりと笑うと、やはり玄関の方に向かった。玄関に、レネが直接やってきた。レネがコブラ女に会わないようにできるだけ急いで、三人はレネをガードするかのようにカルロスの別荘を後にした。女のヒステリックな泣き声にレネは何度も振り向いたが、三人が阻んでいて、戻ることは叶わなかった。
カルモナ行きのバスは夕方の五時に出発した。稔はレネの荷物を頭上

の棚に載せてやった。
「ヤスは恋したことってないんですか」
レネは訊いた。
「あるさ。たくさん。失恋もお前並にしているよ。単にああいうタイプじゃないだけだ」
「そうですか。だから優しいんですね」
「失恋経験と優しさはあまり関係ないさ。俺は、いや、俺たちはみんなお前が心配なんだ。大事な友達だからな」
レネは夕闇の中に遠ざかるセビリヤの街を振り返った。レネにとっても疑う余地はなかった。あの女をどれだけ好きであるとしても、この仲間達と離ればなれになることは考えられなかった。

カルモナ、白い午後

春先であっても、白い壁に反射する光は強かった。迷宮のように入り組む白い壁。開けられたいくつかの家の玄関からは、アラベスク模様のタイルが敷き詰められた涼しげな中庭が見えた。アンダルシアに残るイスラム世界の名残りは、訪れる人に異国情緒を与える。

バルの表に出た椅子に腰掛けて、ヴィルは通りかかったドイツ人たちの会話を意識もせずに聞いていた。
「今夜はどのチームだ？」
「バイエル・レヴァークーゼンとSCフライブルグだよ」
「やめてよ。アンダルシアに来てまでなぜサッカーを見なきゃいけないわけ？」
大方のドイツ男のサッカー好きは異常だと、大抵のドイツ女は思っている。そうであっても、サッカーのルールさえも知らないドイツ女はやはり珍しいに違いない。アウグスブルグの小さな劇団に所属して、一番最初にヴィルが戸惑ったのは、演技でも演出でもなく、このサッカーの話題についていけないことだった。ゴールにボールを入れる事ぐらいしか知らなかったからだ。
ヴィルは他の子供たちと一緒に遊ぶ機会がないまま成人した。幼稚園の頃に始めさせられた音楽教育で多忙を極めたからだ。エッシェンドルフ教授の心はとうに離れていたが、母親のマルガレーテ・シュトルツはそれを認められなかった。息子を認知はしたものの、共に住む事も教育する事にも興味のない教授の目に留まるようにと、彼女は躍

起になった。やがて、フルートとピアノの両方で天賦の才能を発揮しだしたヴィルに教授は興味を持ち、急に父親顔をしだしたので、マルガレーテは我が意を得たりと、さらに夢中になってヴィルを追い立てた。

学校で同級生たちが母親の手作りのパイの話をしたり、家族でイタリアにキャンプに行ったという話をした時に、ヴィルは自分の家庭は他と違う事を認識した。両親にとって愛情とは音楽を教え込む事だった。優しく抱きしめられた記憶もなければ、サッカーの練習や釣りなどで笑い合いながら語ったこともなかった。クリスマスのガチョウを家族で囲んだ事もなかった。学校の成績が悪いと「エッシェンドルフの跡継ぎにふさわしくない」と怒られ、夏休みの子供キャンプに行きたいと言えば、「フルートのレッスンに差し支える」と却下された。

父親は、そのうちにフルートのレッスンだけではなく、生活の全ての事に口を出すようになった。いずれは自分の跡継ぎとして社交界デビューをするために、上流社会のしきたりや振舞が完璧でなくてはならない。テーブルマナー、手紙の書き方、立ち居振る舞い、社交ダンス。教え込まなくてはならない事は山のようにある。あの低俗な母親には任せておけない。それが父親の考えだった。ヴィルにはほとんど自分の時間がなかった。母親と住むアウグスブルグと、父親のミュンヘンの館を移動する電車の中だけが、ヴィルに許された学校以外で音楽と父親の支配から離れられる時間だった。

父親の厳しい指導の成果が上がり、フルートの技術は急激に向上した。父親がいい教師に変えさせてから、ピアノの技術もピアニスト志望の生徒を軽々と超えてしまった。

だが、ヴィルは大きな問題を抱えていた。抑え続けられたために日常生活で感情を表現できなくなってしまったのだ。思春期の性の目覚めの時期にも、両親や音楽の教師たちは無頓着だった。彼の感情表現は奏でる音楽の中だけに集中した。それがますます音楽の才能を伸ばしたので、誰も彼の問題に真剣に取り組まなかった。

十九歳の時、ヴィルはフルートのコンクールで優勝した。父親は、息子のデビューのために着々と準備を進めていた。大学に入学して以来、ヴィルは母親のフラットを出てＷＧ（共同生活）で暮らし始めていたのだが、父親は契約を解除してミュンヘンのエッシェンドルフの館に遷れと命じた。

ヴィルは、突然我慢が出来なくなった。遅い反抗期だったのかもしれない。フルートをやめると宣言した。父親も母親も許さなかった。自分はもう児童ではない、強制はできないはずだと言い切った。そして、前から興味のあった演劇の道に入った。

劇団の雑用係を兼ねて演技指導をしてもらう所から始めた。人と上手く接する事が出来ないのは感情表現の問題だと思っていたので、その指導はフルート以上に役に立つはずだった。そして、確かにある意味では役に立った。ヴィルはあっという間に演技の技術も習得していった。子供の頃から厳しい指導に慣れていたので自己克己が並大抵ではなかった。加えて自己流の感情表現がほとんどなかったために、技術としてそれを表現する事に全く抵抗がなかった。しかし、職業としての演技は身に付いても、単に仮面が増えただけのことだった。自分の真の感情を適切に表現するのはかえって難しくなってしまった。

恋も上手く出来なかった。本能としての性欲の対象として女性とつ

きあう事は出来ても、相手に対する恋情も愛情も生まれてこなかった。
　それでも劇団の仲間たちは次第にヴィルを受け入れてくれた。「変なヤツ」であることを前提に、一緒にビールを飲み、オクトーバーフェストに出かけ、サッカーのルールを丁寧に解説し、演劇の未来について自説を熱く語ってくれた。演技力を買って、準主役級の役をつけてくれる事もたびたびになってきた。だが、もちろん演劇だけでは食べられなかったので、ナイトクラブでピアノを弾いた。こちらの腕は言うまでもなく確かだったので、生活に困る事もなかった。
　その八年間に、父親は新しい生徒を見つけたようだった。たまに呼び出されて帰ると、母親の酒量が増えていた。父親が女の生徒に手を出すのはいつもの事じゃないかと言っても、母親はお前のせいだと責め立てた。お前がフルートを続けて、館に遷っていれば、あの女の出る幕はなかったはずだと言って。どうやら父親はその女を館に住まわせているらしかった。フルートの教えだけでなく、パートナーとしてありとあらゆる場所に連れていくらしい。
やがて、婚約したので、未来の母親に会えと父親から連絡が来た。
「結婚するのはそっちの勝手だ。俺には関係ないだろう」
「馬鹿なことを言うな。フルートはやめても、お前がエッシェンドルフの跡継ぎである事は変わらない。家族の一員として、会うんだ」
その有無を言わせぬ言い方に腹が立った。
　マルガレーテは大きなショックを受けたらしかった。たとえ、教授が何人の女に手を出そうとも、最後に選ばれて妻になるのは彼女のはずであった。それを奪った女への憎しみが爆発した。
「絶対に許さない。姑息な牝犬め」
　シュナップスを飲み暴れる母親から、ヴィルはその瓶を取り上げてから帰った。みっともない姿に心からうんざりしていた。それが生きていた母親を見た最後だった。
　翌日、母親が死んだという報せを受けて、仕事を休んで飛んでいった。睡眠剤と酒の相乗効果だと医者に説明された。父親にそのことを報せようとミュンヘンの館に電話したら、ザルツブルグ音楽祭に行っていると言われた。連絡がとれ報せた時にも、大して興味はなさそうだった。
　ヴィル自身は混乱していた。亡くなった母親との関係は良好とは言えなかった。自分はずっと父親の氣を引くための道具のように感じていた。だが、だからといってまったく思い出がないわけではない。厳しい音楽の教育ばかりが押さえつけて来た記憶の隅々に、やはり息子を愛していたごく普通の母親としての顔があった。もっと優しくしてあげるべきだったかもしれない。もっと話をすべきだったかもしれない。あんな男にこだわるのはやめて、自分の人生を生きろと。だがすべてもう遅すぎた。一方で、少しだけほっとしている自分もいた。全く望みのない夢にこだわる愚かな女の妄執を、もう蔑まずに済むことをありがたく思っていた。そう感じる自分の冷たさにショックを感じてもいた。
　母親の葬儀を済ませて、事後処理をしていると、父親の秘書からすぐに来てほしいと連絡が入った。
「お父様が大変なショックを受けておられて、あなたを必要としています」
そう言われたのだ。行ってみると、婚約者が失踪して、完全に取り乱

した父親がそこにいた。

「ドイツ人の同胞に惹かれるの？」

蝶子が皮肉っぽく笑っていた。まぶしい光の中に、ヴィルは戻って来た。そこに座っているのは華奢な日本人。冷淡で奔放なのに、たぶん世界で一番近く感じる女だ。この女が誰なのかを知る前に、鋭く腹の立つ物言いと守る氣にまったくさせない強さを知る前に、ヴィルは彼女の奏でるフルートの音色を聴いていた。それが蝶子の印象を決めた。自分にとって感情の発露がフルートとピアノだったので、彼は他人の音色にも敏感だった。ヴィルは透明で美しい音色の奥底に痛みを感じた。理解してもらえなかった過去と折り合いをつけて生きているのがわかった。そして冷静な表面の奥には、隠せない情熱の炎が燃え盛っていた。

稔の印象も三味線の音が決めた。明るく力強く愉快だが、その音は単純ではなく、深みの度に違う音色の層が重なっていた。そしてずっと底の方に危うさがある。リーダーとしての思いやりがあり、きちんとした周到さがあるかと思えば、無頓着でちゃらんぽらんな所もある。そのバランスが絶妙だった。実際、稔はグループのバランスを上手にとっていた。蝶子、レネ、ヴィルとあまりにも個性の違う三人だけだったなら、一週間と持たなかったかもしれない。稔はArtistas callejerosの要石だった。

レネは、ヴィルにとってはじめて身近なフランス人だった。フランスは国境を接した隣国であるのに、ドイツ人にとってのフランス人は極東の日本人よりも遠い事がある。レネは典型的なフランス人だった。実際的ではなく、ロマンチストで、惚れっぽい。言う事が理論に則っておらず、さらに時間に正確ではない。けれど、ヴィルは最初の日にもう、この情けないフランス人が大好きになってしまった。ヴィルはこれほど柔らかく、感情を大切にする人間に会ったことがなかった。人に優しくて、人懐っこい。蝶子にいいようにあしらわれても、子犬のように尻尾を振っている。そして、その優しさと柔らかさの下に、静かな知性が光っている。図書館がそのひょろ長い肢体のどこかに詰まっているようだった。移動の度に新しい本を読んでいた。もちろん、荷物の量が限られているので、読み終わった本はどこかに行くのだが、一度読んだ本の内容は全て彼の内なる図書館に収められるらしかった。とくに詩の知識は豊富で、フランス語だけでなく、英語もドイツ語もイタリア語もすべて原語で暗記しているらしかった。けれど、その膨大な知識には全く嫌味がなかった。

ドイツ人の同胞に惹かれるなんてとんでもない。そこにいるやつらはサッカーの話しかしない。

「サッカーには興味はない」

蝶子は片眉を上げた。ヴィルがArtistas callejerosにいて心地のいい事の一つに、仲間たちの反応があった。ヴィルが必要最小限の事しか言わなくても、極わずかな表情しか見せなくても、彼らはそれを簡単に理解した。そして、それ以上を要求しなかった。レネが本屋に行き、稔が散髪に行っているのを待つ間、蝶子は、ティント・デ・ベラーノを傾けて園城真耶あての手紙を書いていた。稔と蝶子のパスポート更新のためには戸籍謄本が必要だった。二人とも家族には頼めないので、委任状を書いて代わりに取得してもらわなくてはならなかった。

それを頼めるのは今の二人には真耶しかいなかった。
　ヴィルには蝶子を観察する時間がたっぷりあった。父親が会うようにと命じた婚約者。日本人だとは聞いていたので、見かけが予想と大きく離れていたわけではない。しかし、こんな生意氣な女にあの父親が夢中になったとはとても信じられない、ミラノではそう思った。威圧的で周りを支配しないではいられないハインリヒ・ラインハルト・フライヘル・フォン・エッシェンドルフが、この女に振り回されたのだ。だが一緒にいる間に、ヴィルは少しずつ理解するようになった。蝶子には魔性があった。怜悧な近寄りがたい横顔から一転して溢れる笑顔になる時がある。こちらの心を突き通すような魅惑的な目つきでかすかに微笑む事がある。そして厳しく挑むような表情で考え込んでいるときもある。レネのような初心な若者はもちろん、カルロスのような人生経験の豊かな男も、ロッコ氏のような広く浅くどのような女でも好む男も、蝶子の魅力に簡単に振り回される。そして、それはヴィルも例外ではなかった。ヴィルはどちらかというと女を見下してきたので、以前は女に振り回される男を軽蔑していた。蝶子を念入りに観察してきたのは、父親がなぜこの女に夢中になったのか知りたいためだったが、そんな事はすべきではなかった。自覚したのはバルセロナだった。自分の中に今まで一度も感じた事のない感情が芽生えていた。蝶子とアルゼンチン・タンゴを踊るカルロスに対するいわれのない嫌悪感、それは嫉妬だった。
「二人は遅いわね。もう一杯頼もうかな。テデスコ、あなたは？」
　空になったティント・デ・ベラーノのグラスを振りながら蝶子が訊いた。ヴィルは黙って自分の空になったセルベッサのグラスを示した。蝶子は肩をすくめるとウェイトレスを呼び、二人分のお替わりを注文した。
「さ。私は書き終えたから、ひと言書いてちょうだい」
蝶子は、便せんをヴィルに渡した。
「一足早い春を楽しんでいる」
そう書き添えた。蝶子が覗き込んでいった。
「テデスコって、まさにドイツ人っていう字を書くのよね。きっちりとして、読みやすい、カリグラフィのお手本みたい」
「あんたの字の方がきれいだ」
「ドイツで仕込まれたのよ。汚い字は人生の面汚しだって」
　蝶子はせせら笑うように言った。親父のいいそうな事だ。ヴィルは思った。ヴィルの字も父親に強制された結果だった。ロッコ氏が感心した蝶子とヴィルの身のこなしも、偏執狂的と言ってもいいほどの完璧主義のエッシェンドルフ教授の厳しい教育の成果だった。もちろん二人の奏でる音楽も。蝶子とヴィルはどちらも教授の自慢の作品だった。ヴィルは幼少の頃から父親の美意識を叩き込まれて育った。どれほど反発し、憎むようになっても、同じ音楽を愛するように、女に対しても同じ理想をどこかに持っていたのかもしれない。よりにもよってなぜこの女なんだ。世界中にはこんなに女がいるのに。
　ヴィルには三つものハンデがあった。一つははじめての経験でどう感情表現していいか、まったくわからないことだった。舞台の演技とは全く違う。セックスだけが目的で行きずりの女を誘うのともわけが違う。二つ目のハンデは蝶子がArtistas callejerosの仲間は恋愛除外に指定している事だった。こんなに近くにいるのに。そして三つ目は、

自分が誰だか明らかに出来ない事情だった。さっさとこんな馬鹿げた感情は摘み取ってしまわなくては、ヴィルはそう思っていた。しかし、それと反対に心は動いた。

「おい、ブラン・ベック。いい本が買えたのか」
「ええ。なんとロルカのフランス語対訳本があったんですよ。セビリヤにはなかったから期待していなかったんですけれど」
　稔はレネがコブラ女の呪縛から放たれたことを感じてほっとしていた。基本的にこの手の呪縛からの解放には物理的な距離が大きな助けとなるのだ。ひとまず安心だな。だが、稔は Artistas callejeros の潜在的なリーダーとして、もう一つの呪縛には同じ解決策を適用できないことを感じていた。稔は、かなり先に見えているバルに座っている蝶子とヴィルを見て腕を組んだ。蝶子が何か紙を覗き込んでいるのだが、ヴィルはその蝶子を見つめていた。
「おい。どう思う」
稔は顎で二人を指して言った。
「どうって、あの二人のことですか」
レネは答えに困った。
「テデスコだよ。やばいよな」
「やばいって、何がですか」
「トカゲ女にはまったらしい」
レネは多少ふくれっ面で抗議した。
「僕だって、パピヨンをずっと好きだったのに、ヤスはなんでテデスコだけ心配するんですか」
稔は笑った。
「そうだっけな。でも、お前はいいんだよ。だって、トカゲ女だけじゃなくて、あっちにもこっちにも惚れて、黙って思い詰めているわけじゃないじゃないか」
そういわれてみれば、その通りだった。
「でも、テデスコだって『外泊』とかしていたじゃないですか」
「それだよ」
稔は再び考え込むような顔になった。
「あいつ、『外泊』しなくなっちゃったじゃないか。相当マジになりかけているってことだろ」
「そんなに心配することなんですか？　パピヨンが素敵なのは事実だし、別にいいと思うんですけれど」
　稔は少し黙った。
　あれはアルヘシラスに向かうバスの中だった。グラナダで遅くまで飲んでいて、朝が早かったので、蝶子はバスの中で眠っていた。誰が誰の隣に座るなどということは誰も氣にしていない。その日は稔が蝶子の隣だった。深く眠りに落ちて、蝶子は稔にもたれかかった。口をきかなければ、こいつかわいいじゃん。稔はそう思った。けれど、次第に重くなってきた。特に肩甲骨の上に重みをかけられると痛い。
「ちょいと、ごめんよ」
そういいながら、稔は蝶子の頭を少し動かした。それが日本語だったので、深い眠りから戻ってこなかった蝶子は自然に日本語で寝ぼけた。
「やめてよ。眠いの」
　そういって、こんどは稔の腕に顔を埋めてしまった。おい。トカゲ

女。誰がそんなことしていいって言った。そのときに蝶子の日本語の声でこちらを振り向いたヴィルと目が合った。
　ヴィルはいつもの無表情だった。けれど、その乏しい表情から正確な喜怒哀楽を読み取る能力のある稔は、ヴィルの心の痛みを即座に感じ取った。いや、こいつが寝ぼけているだけで、俺とトカゲ女は全くなんでもないから。稔は目で必死に訴えたが、ヴィルは何も言わずに目をそらした。げ。こいつマジかよ。稔はそのときにヴィルが蝶子に魅かれていることを知ったのだ。こんなやつ、やめた方がいいって。稔は思った。けれど、人の心が止められないことぐらい、稔にはよくわかっていた。
「テデスコはお前と違って、想いを外に出せないだろう。クールに見えるけれど、そうとうの情熱家なのは音を聴けばわかる。ああやって黙っていると、どんどんはまると思うんだけどなあ」
「テデスコは口や表情には出さなくても、ちゃんと想いを外に出していますよ」
レネが言った。
「ん？」
「ピアノ、すごくロマンティックに弾くじゃないですか」
「それだよ。この間のピアソラ。あんなに苦しい音を出されたんじゃ、こっちが持たないじゃないか」

ロンダ、崖の上より

「ヤスは、遅いわねぇ。今からみんなで出るとすれ違っちゃうかもしれないし、どうしようかしら」
　蝶子は買い出しにはもうあまり時間がないと、心配して時計を見た。稔は園城真耶に電話をしにいっていた。蝶子がそろそろ手紙が着いた頃なので電話をしにいくというと、大学以来面識のない自分の分まで戸籍謄本をとってもらうのに、挨拶の一言もないというのは礼儀にかなわないと主張した。それももっともだと蝶子も思ったので、電話の方は稔に頼むことにしたのだ。しかし、思ったよりも時間がかかっているようだった。
「二人で行ってきてください。ヤスが帰ってきたら、そういいますから」
レネが言った。
「なんだか熱っぽいんです。今晩は食事抜きで寝ていますよ」
怪訝な顔で蝶子はぐったりするレネの額に手を置いた。レネは赤い顔をもっと赤くした。
「いやだ。すごい熱じゃない！　今すぐベッドに入って」
蝶子は命令した。ヴィルはすぐに上着を取り、出て行く準備を始めた。閉店前に薬を買ってこなくてはならない。蝶子は「すぐにもどるから」と言ってヴィルと一緒に外に出た。
「確か、パラドール前の広場に薬局があったはずよ」
その通りだった。ヴィルは熱冷ましの薬と体温計を買った。蝶子は外に出ると言った。

「ビタミンCも摂った方がいいわよね。オレンジかしら。ついでに買いに行きましょう」
「交渉は、あんたがするんだな」
ヴィルはぼそっと言った。蝶子は吹き出した。はじめて会った時、この人イタリアの果物屋の親父にぼったくられていたわよね。
果物屋を求めて、橋の向こう側へと渡る。橋の上にきた時に、蝶子は思わず停まった。
「まあ」
ロンダの街は本当に崖の上にあるのだ。橋は地上百メートルの高さに浮かんでいるようだ。その先にはアンダルシアの大地が広がっている。鷹が風に支えられて遥かに続く赤茶けた大地の上を遠くへ遠くへと飛んでいく。その力強い飛翔をみつめる蝶子の横顔に夕日があたっていた。
「ああやって、飛べたらいいっていつも思っていたわ」
ヴィルは黙っていたが、聴いているという印に蝶子の方に向き直った。蝶子は鷹を目で追っていた。父親のことを考えているのだろうかと、ヴィルは考えた。腹の底に痛みが走る。ミラノで会った時には、こんなことになるとは夢にも思わなかった。
半ば強制的に引かされた二枚のタロットカード。愛の始まりと誤算。ブラン・ベック、あんたは本当に大した占い師だ。これが運命だとしたら何の因果なのだろう。父親が愛し、母親が憎んだ女。父親は絶対に認めないだろうし、母親が今でも生きていたとしたら、間違いなく更に逆上した事だろう。
「ああいう風に自由になりたかった。本当の自由になんか、誰もなれないのにね」
蝶子は続けた。
「あんたは今でも過去から自由になれないのか」
蝶子は、振り向いた。
「逃れたかったものからは自由になったわ。でも、失いたくないものが出来てしまったの。前はそんなもの何もなかったのに」
「あんたがいま持っているものは、何も失わない」
蝶子は意外そうにヴィルを見た。ヴィルは青い目で蝶子の目を覗き込みながら続けた。
「あんたは最低限のものしか持っていない。そしてそれは誰にも奪えない。あんた自身が手離そうとしない限り」
でも、それはヤスやブラン・ベックやそれからあなたの事なのよ、テデスコ。蝶子は思った。私が絶対にあなたたちを失わないなんて、どうして知っているの。だが、ヴィルは蝶子の言う意味を正確にわかっていた。稔やレネはArtistas callejerosから離れる事はない。つまり蝶子の側を離れない。ヴィルの心も同じだった。だが、いつかは俺が誰なのか、あんたにわかる日が来る。その時にはあんたは俺から離れていくだろう。
「急がなくちゃね」
蝶子は足を速めた。ひどい後ろめたさを感じて。かわいそうなブラン・ベックのことを完全に忘れてしまったじゃない。青い目に吸い込まれそうだった。
レネや稔だけでなく、蝶子もヴィルの変化を感じ取っていた。出会った頃は殻にこもり、いつもひどく身構えていた。そしてもっと冷

たかった。とくに蝶子に容赦がなかった。あの頃、蝶子はヴィルとの舌戦を楽しんでいた。すぐに傷ついてしまうレネや、日本人同士の稔とは出来ないゲームだった。世界を斜めに見ているヴィルの冷たさは、自分も同じく世界に熱くなれない蝶子には心地が良かった。それでいて、多くを語らなくてもわかり合える何かがあった。蝶子がヴィルの無表情から、彼の喜怒哀楽を正確に読み取れるようになるのにさほど時間はかからなかった。稔やレネも同じくその技術を身につけた。

ヴィルはレネに優しく、稔に敬意を表し、蝶子に厳しかった。そのバランスが三人ともとても心地よかった。それが動き始めている。蝶子に対しての鋭さが薄れてきているのだ。時には優しいとすら言えるような態度を示す。それが蝶子を不安にさせた。

変わらないでほしい。それが蝶子の願いだった。この果てしない旅をいつまでも四人で続けたい。本来は無理な願いを蝶子は持っていた。いつ、レネがパリに戻りたいと言い出すか、いつ稔が日本に戻ると宣言するか、それは誰にもわからないし止められなかった。過去の事を一切語ろうとしないヴィルも、まともな暮らしをもとめていつ去ってしまうかわからなかった。けれど蝶子には帰るところがなかった。かつては誰にも求められない存在である事に傷ついたりはしなかった。フルートを吹きたい、それだけが蝶子の生きている意味だった。家族や友だちなど必要なかった。自分に愛を打ち明けた何人もの男性を拒否することにも何の感傷もなかった。彼らがその後、簡単に自分の人生から姿を消してしまったことにも苦痛はなかった。

けれど、蝶子はArtistas callejerosのメンバーは失いたくなかった。最初からレネが女としての自分に興味を示していても、頑として無視したのはそのためだった。レネは蝶子のコンピュータの重要データのたとえを理解し、蝶子には真剣になっていない。いつものブラン・ベックとして蝶子の側にいる事を選んでくれている。この距離感があれば、蝶子はレネと百歳になるまで仲間として一緒にいられる事を肌で感じていた。

稔が蝶子をトカゲ扱いして、最初から恋愛対象から完全除外してくれているのもとても有難かった。兄妹のような近さで、同じ国から来た同胞としてやはり変わらない友情と尊敬を保ち続けられる、その予感が蝶子を安心させていた。

けれど、ヴィルの事は何もわからなかった。何も知らなかった。知りたいと思うのは、興味本位ではなく、信頼の問題だった。はじめの頃は一切話さなかった両親との確執や、エッシェンドルフ教授との問題を、蝶子はぼかした形とはいえ、三人にさらけ出していた。他の二人も、そうだった。ヴィルだけが違った。レネが泣きながら妹の思い出を語ったような、もしくは稔が遠藤陽子にあてた送金の話を打ち明けたような、痛みの共有が何もなかった。両親の思い出も、バイエルンでの体験も何も話そうとしなかった。なぜピアノがあれほど上手いのか、それでいてなぜ演劇をやっていたとしかいわないのか、それも蝶子を不安にさせた。

最初は蝶子のようなタイプの女が嫌いなのだと思っていた。こういう性格だと女としては好かれるよりも嫌われる事が多いので、不思議はなかった。稔がそうであるように、人間として仲間として認めてくれていれば、それで十分だったし、かえって有難かった。蝶子も安心して男としての除外範囲に押し込められるからだ。ハードディスクの

重要データとして、それはとても大切な事だった。そうでなくともレネのようにうかつに尻尾を振ってくれれば、軽くいなす事もできた。けれど、先ほどのように青い目でじっとみつめられると、蝶子の居心地はひどく悪くなる。めったに口を開かないくせに、全く不似合いな優しい言葉を遣われると、どうしていいのかわからなくなる。何を考えているのかわからない。彼も、自分も。蝶子にできるのは、はぐらかす事だけだった。

「う～ん。ひどい熱だな」
稔が体温計を透かしながら言った。レネはヴィルから薬と水を入れたグラスを受け取り、難儀そうに飲み込んだ。蝶子はオレンジを絞っていた。
「いつから具合悪かったんだ？」
「今朝寒いなと思ったんですけれど……」
赤い顔でつぶやくレネはまるで稔に怒られてしょげているように見えた。稔はオレンジジュースを持ってきた蝶子に場所を譲った。
「この部屋は風が通るんだよな。少しましな宿に移そうか」
「そうね。その方がいいかもね。ホテル探してこようかしら」
するとレネは大きく首を振った。
「探さなくていいです。みんなが側にいる方が安心だから……」
三人は顔を見合わせた。ヴィルが毛布をもう一枚かけてやった。やがて薬が効いてきたのかレネは寝息を立てだした。
三人はレネが目を醒まさないように、小声で話をした。
「どうする。ブラン・ベックが治るまで、仕事には出ない方がいいよな」
「そうね。ずいぶん心細くなっているみたいだし」
「医者に診せなくていいのか」
「明日の朝まだ同じ状態だったら、診せた方がいいと思うわ」
蝶子は不安そうにレネを見た。今まで仲間の誰も医者が必要になるような病氣や怪我をしたことがなかった。だから、そういうものとは無縁だと思っていた。けれど、生きている以上、こうしたことはいつでも起こりうる。明日蝶子自身もそうなるかもしれないのだ。蝶子は健康保険に加入していないことを思い出した。
「ブラン・ベック、保険に入っているのかなあ」
稔も同じことを考えていたらしかった。
「フランスの保険はスペインでは効かないぞ」
ヴィルが言った。
「だよなあ。テデスコ、お前は？」
「かつては、海外でも効く保険に入っていたよ。だが、ドイツを出て以来、掛け金を払っていないから申請をしても支払いを拒否されるだろうな。あんたたちは保険かけて大道芸人しているのか？」
「そんなわけないでしょう。私たち全員アウトだわ」
蝶子はため息をついた。
「大道芸人生活って、若くて健康だからこそできるのよね」
「そうだな。ヴィザすらない俺たちは保険だってかけられないぞ」
稔も真剣な顔でいった。
「ねぇ。なんとかしましょう」
蝶子はきりりとした目で稔を見つめた。稔はたじたじとなった。

「なんだよ、なんとかって」
「ヴィザよ。とにかく少しでも合法的にこの生活が続けられるように、取得しましょう」
「そんなこと言ったって、どうすんだよ」
「だって、私たちには何人か雇い主がいるじゃない。コモのロッコ氏とかマラガのカデラス氏とか。誰か一人でもヴィザの申請をしてくれるように頼んでみるのよ。なんなら、色仕掛けでも……」
「やめろよ、そんなこと」
稔が即座に否定した。
「なぜよ」
「そりゃ、お前なら、結婚でもしてすぐにヴィザ用意してくれそうなヤツだってすぐに見つかるだろうけど、そんなことをしたらせっかく逃げ出してきた意味がないじゃないか。それに男の純情をヴィザのためなんかに利用するんじゃねぇ」
　稔が蝶子にこんこんと説教するのを、ヴィルは少しほっとして聴いていた。稔が言っているのはカルロスのことだと思った。だが、稔は実はヴィルのために蝶子を説得していたのだ。自分の分も含むヴィザのためにヴィルが苦しむようなことをさせるのは絶対に嫌だった。
「わかったわ。色仕掛けはやめるわよ。でも、助けてくれるか頼むぐらいはいいでしょう？　それとも、私たち二人、日本に帰るべき？」
「ち。なんだよ。俺の泣き所をついてくるじゃねぇか。まあ、いいよ。とりあえず例によってギョロ目にでも相談するんだな。だけど、色仕掛けは厳禁だぞ」
「カルちゃんに色仕掛けの必要はないわよ」
蝶子は澄まして答えた。ヴィルが苦しそうな表情をしたのを、稔は目の端で捉えた。

　幸いレネの熱は朝には下がっていた。
「すみません。お騒がせしました」
「まだ寝ていなきゃ。あらやだ、すごい汗をかいたんじゃない。すぐに着替えて。ついでだから今日は洗濯日にしてしまいましょう」
蝶子はてきぱきと面倒を見た。レネは幸せだった。弱っている時に頼れる仲間がいるってなんて素敵なんだろう。

マラガ、ハイビスカスの咲く丘

「ようこそ、マラガへ」

カルロスのクリスマスパーティで会った、カデラス氏はたいそう愛想よく言った。マラガ市内海岸沿いの公園に面したコルティーナ・デ・ムエレ通りに新しく開店した最高級クラブ『Estrella del Mar』は、十九世紀のいかめしいビルディングの中にあるとは思えないほどモダンだった。黒く光る大理石の床や壁とワイン色の革のソファが落ち着いたアイレを醸し出している。店の一番奥にスタンウェイが置かれていて、暗い店内の中でそこには柔らかいスポットライトがあたるようになっていた。好奇心から、バーのメニューを開けてみた稔は、ワイン一本が最低でも八十ユーロしているのにあわててそっと閉じた。

ここでの仕事は、面白いことは一切やらなくていいということだった。とにかく高級そうに、そしてお高く止まって仕事をしてほしいというのだった。

実際に、その店には、面白いことを求めているような客はほとんどいなかった。どちらかというと上品に社交をしているか、堅苦しくビジネスについて語っているか、それともにらみ合うような真剣さで愛を語っているような客ばかりだった。

レネはアンビシャスカードを演じる時に、普通のトランプではなくタロットカードを使った。その流れるような美しいカードさばきと、フィレンツェで買った高級なカードが手品の内容をさらに上品に見せて、年配の女性客に人氣だった。どういうわけだかわからないが、いつの間にか、レネはカードマジックを演じるよりも常連のドンナたちにタロット占いをする時間の方が多くなってしまった。しかし、それがカデラス氏を大いに喜ばせたので、他の三人は放っておいた。

稔が出るときは、できるだけクラッシックな音楽を弾いた。最初はタレーガを弾いていたのだが、なぜかバッハによるリュート曲の方が受けがいいので、ひたすらバロック専門で弾くようになってしまった。

カデラス氏が大いに期待するのはいつもヴィルと蝶子のアンサンブルだった。二人が何を演奏してもカデラス氏はベタ褒めした。もっとも他の雇用主と違って、カデラス氏は蝶子ではなくてヴィルをやたらと絶賛した。

「ありゃ、そっちのケがあるんだな」

稔が言うと、蝶子はにやりと笑った。ヴィルは無表情だったが、ありがたがっていないのは確かだった。

カデラス氏はヒブラルファロの丘に別荘を所有しているので、そこで寝泊まりしてほしいと言った。パラドールが隣接しているヒブラルファロ城のすぐ側にあり、テラスからは夜景に輝くマラガ市と美しくライトアップされた闘牛場、そしてどこまでも続く海が見えた。仕事が終わった後の夜二時半頃、丘を歩いて登りながらさすがに静かになりかけているマラガの町を見渡すのが四人の日課となった。もちろんその後に酒宴を催すようなことはなく、たいてい全員九時頃まで起きだしてこなかった。

いつも一番先に起きるのはヴィルだった。庭に出て、劇団時代からの習慣となった筋肉トレーニングをする。それからキッチンでコーヒーを淹れる。たとえ、寝床に向かうのが一番遅くても同じだった。次に起きてくるのは蝶子か稔で、レネはいつも最後だった。

稔は眠りが浅い方で、たとえば夜行列車の中やドミトリーの部屋で、レネがいびきをかいたり、蝶子が寝言をいいながら寝返りを打ったりすると、真夜中でもすぐ目を醒ましてしまうのだが、その時に何度もヴィルがベッドに起き上がって窓の外を眺めているのを目にしていた。その後、稔はまたすぐに眠りに落ちるのだが、たぶんヴィルは長いことそうしているのだろうと想像していた。

考えてみると、イタリアにいた頃は、そんなヴィルの姿を見た記憶はほとんどなかった。つまり、ヴィルが不眠ともいえる状態になったのは、スペインに来てからなのだろう。符合する。トカゲ女にはまったのと同時期だ。

ヴィルについて稔は蝶子と同じように困惑していた。どうしても抜けられない壁の向こうにいるドイツ人を稔は理解すると同時にもどかしく思っていた。過去について口にすることができない。あふれる情熱を音楽以外で表現することもできない。細やかな優しさとひどい冷たさが共存している。どこかで受けた傷を癒せないのかもしれない。それともはじめから誰かを信用することを教えられないまま大人になってしまったのかもしれない。誰にも愛された記憶がないのかもしれない。だから愛を表現することもできないのかもしれないと。江戸っ子の稔にはヴィルのやっているようなまどろっこしいことはとてもできそうにもなかった。

「ここって、本当に南国なんだわ」

コーヒーを飲みながら蝶子が言った。

「海ですか？」

レネが問いかけた。

「庭から海が見えるんだけれどね、そこにハイビスカスが咲いているのよ。しかも温室でなくって地植えなの」

蝶子は嬉しそうに言った。

「へえ。あれってハワイみたいな常夏の国に咲いている花かと思った。四月のヨーロッパにも咲くんだな」

稔にも意外だった。

「コスタ・デル・ソル、太陽海岸っていうぐらいだ。アルプス以北のヨーロッパ人にとっては楽園みたいなものだな」

ヴィルは遠く濃紺に輝く海を見渡した。

「あとで、海岸に行ってみない？」

蝶子ははしゃいだ。海は大好きだった。

「ＯＫ。でも、先にギョロ目に電話してからだ。一ヶ月したら再びたかりに行くってな」

稔が言った。園城真耶に頼んだ書類は、そろそろコルタドの館に着いているはずだった。二人がバルセロナの領事館で更新手続きをするには、少なくとも二週間以上かかるはずだ。加えて、蝶子がカルロスにヴィザのことを上手く切り出して協力してもらうとしたら一ヶ月近く滞在する必要がある。稔はレネとヴィルの様子を横目で見た。

レネは複雑な心境だった。既に恋愛感情はないとはいえ、大好きな蝶子とカルロスがやたらと親しくするのは面白くない。だが、イネスの作る料理と四時のおやつが恋しくてたまらないのも事実だった。アヴィニヨンの生家は別にして、あれほど居心地のいい空間はない。レネにとってイネスは第二の母親だった。

ヴィルの方は、完全な無表情に潜り込んでいた。ということは、かなり深刻なわけだ。おととい稔が多数決にかけた長期バルセロナ滞在の案件にヴィルは賛成票を投じなかった。蝶子が健康保険の重要性を示唆してヴィザが欲しいのでカルロスの助けを求めたいのだと説得したので、レネが賛成に転じた。それで多数決が成立したが、最後までヴィルは黙っていた。ヴィルにしては正直な反応だと稔は思った。頼むから、滞在中あんまりギョロ目にべたべたしないでくれよ、トカゲ女。稔は願った。

絵に描いたような海水浴場の風景だった。青い海、白い砂浜、縞模様のパラソル。しかし、人影はない。蝶子とレネははしゃいで素足になり、海に入った。

「コルシカでも、こうやって海に入ったのよ。でも、あのときは一人だったものねぇ」

「コルシカのどの海ですか？」

「ボニファチオの近く。誰も行かない隠れ家みたいなビーチがあったの。誰にも会いたくなかったし泣いてばかりいたのよ。でも、海に入って、足下を波に洗わせていたら、もういいかなって思えてきて、それでイタリアに移ることにしたの」

「僕は南には行かなかったから、あそこでは会えませんでしたね。でも、パピヨンが決めてくれてよかった。僕やヤスと同じフェリーに乗ることを」

「そうね。あれが始まりだったものねぇ」

蝶子は感慨深げに言った。足下は同じように波に洗われている。でも、あの時とは全然違う。レネの両足もまた、すぐ近くで波に洗われている。

「おい、お前ら、何で足なんか見てんだよ」

しびれを切らした稔が遠くから叫んだ。二人は笑って海から上がると、裸足のまま靴を両手に持って稔とヴィルの元に戻った。

「夏になったら、どこかで海水浴しましょう」

「へ？　いいよ。地中海沿いにはいくらでも海があるからな。それはそうと、そろそろ飯を食いに行こうぜ」

稔は言った。

四人は近くのバルに入った。スペインではレストランに入るよりもバルで食事をすることの方が多かった。少しずつ好きなタパスを頼んでは一緒につつき、酒を飲む。稔はイベリコの生ハムに煩悩していた。こんな美味いものはない、そう思った。レネはいつもオリーブに飛びついた。ヴィルはイネスの料理のおかげで苦手だった魚介類を克服し、自らイカリングフライを注文することが多くなった。しかし、あっという間に蝶子と稔に奪われてしまうので、二皿目をすぐに注文せざるをえなくなった。

「こういう下世話な味って、時々無性に食べたくならない？」

蝶子は稔に言った。

「ああ、お祭りのイカ焼き、食いてえな」

稔は遠い目をした。

「なんですか、それは？」

もちろんレネとヴィルには通じなかった。

「日本のお祭りでね、屋台で売る定番の食べ物があるのよ。イカだけ

じゃなくて、焼きそばってヌードルとか、綿飴っていうザラメをつかった雲みたいな形のデザートとか。ものすごく美味しいかといわれると疑問なんだけれど、記憶とともにノスタルジアが喚起されるのよねぇ」
「俺さ、いつも三社祭で神輿を担いでいたんだよな。五月が近づくとなんか血が踊ってきたものさ。だけど、こっち来てから、踊らなくなったな」
「ヨーロッパにもそういうお祭りってあるでしょう？」
蝶子がレネとヴィルを見た。
「カーニバルですかね」
「そうだな。それから精霊降臨祭のパレード。ミュンヘンではオクトーバーフェスト……」
「私は結局一度も行かなかったのよ」
蝶子が言った。
「ミュンヘンに七年もいたのに？」
稔は驚いた顔をした。
「だって、あそこには一リットルのジョッキしかないんだもの。そんなに飲めないわ。一緒に言って騒ぐ友達もいなかったし」
「そういうものなんですか？」
レネが訊くと、ヴィルはだまって頷いた。
「テデスコは飲みまくったんだろうな」
稔はヴィルの手元のセルベッサを見て言った。
「一度離れると座る場所がなくなる。だから、座れたが最後、交代で用を足しに行く以外は一日中ずっと同じ場所で飲みまくることになるんだ」
　他の三人は顔を見合わせた。いくら酒が好きな三人でもそんなのは拷問に思える。
「それで、毎年行きたいって思うわけ？」
「毎年終わる頃には、もう二度と来るものかと思うんだ。だが、次の年になるとまたミュンヘンに向かっているな。そういうものだ」
「じゃあ、今年も行きたいと思う？」
蝶子が訊いた。ヴィルは首を振った。
「あの時期のドイツにいると行きたくなるが、今ここで考えるとなぜ行きたいと思うのか理解できない。わざわざ夜行に乗ってまで行く氣はしないな」
「まあ、そうだな。俺も飛行機に乗ってまで神輿を担ぎに行きたくないもんな」
稔が頷いた。
「でも、イカ焼きは食べたいんでしょ？」
「その話、すんなよ！　マジで食いたくなるじゃないか」
稔は、がばっとすべてのイカリングを食べてしまった。仕方なくヴィルは三たび同じ注文をすることになった。
そんな下世話なものがまだ腹でこなれていないのに、四人は再び『Estrella del Mar』で、スーツとドレスに着替え、開店を待つことになった。
「俺、イカ臭くないか？」
そういう稔に蝶子はクックと笑った。カデラス氏がコホンと咳をし

て、四人のアイレを変えようとした。それで、蝶子はカデラス氏のお氣に入りのヴィルに何かを弾かせてご機嫌を取ろうと画策した。
「ねえ、開店まで何か弾いてよ」
「何を」
「そうね、せっかくだからレクオーナの『アンダルシア』は」
ヴィルは軽い感じで『アンダルシア』を弾き始めた。どちらかというと『そよ風と私』と言った方が近い演奏だった。海に入って波と戯れ、ハイビスカスに目を細め、それからイカリングを争っていた四人の軽く楽しい雰囲氣がまだ残っている演奏だった。開店までだから、それでもいいと他の三人もカデラス氏すらも思って聴いていた。ピアノを弾いているヴィル自身もそういう心持ちのまま弾き始めたのだ。
だが、ピアノにもたれてティント・デ・ベラーノを傾けつつ聴いている蝶子の微笑みを見ているうちにヴィルの心境が変化した。彼は『アンダルシア』を弾き終えると、続けて同じ組曲の中の『マラゲーニャ』を弾きだした。蝶子は最初マラガにちなんで弾きだしたのだと思っていた。が、暗闇の中からくすぶる炎のようにうごめきだしたメロディを聴いているうちにその音色の違いに氣がついた。微笑みが消えた。離れて聴いていた稔とレネもその違いに氣がついてピアノの方を見た。蝶子が完全に引き込まれているのが見えた。静かな中間部に、ヴィルは平静心を取り戻したかのように弾いていたが、後半部になると再び激しく華麗な指の動きの中に、隠せない強い情念を込めて弾いた。あまりに情熱的な演奏に稔とレネは、なかば怯えるように顔を見合わせたが、蝶子は目をそらさずにずっと真正面からヴィルを見つめていた。
カデラス氏は四人の雰囲氣が、彼の望む真剣なものに変わったことを喜ばしく思ったが、このたった一曲の演奏で彼らに何が起こったのかを理解することは全くできなかった。その晩、四人はお互いにほとんど口をきかなかった。

バルセロナ、色彩の迷宮

「なんてことだ」
園城真耶が発送しカルロスの館に届いていた戸籍謄本を見ながら稔が呆然とつぶやいた。
「どうしたの？」
蝶子は訊いた。
「親父が死んでいる」
戸籍謄本から抹消された日付は三ヶ月ほど前だった。稔は五年近く一度も家に連絡を入れていなかった。その間に日本に対して行ったコンタクトは、遠藤陽子への無言の送金だけだった。父親は婚約者の金を使い込んで失踪した息子のことをどれほど憤り怒りながら生涯を終えた事だろう。稔は初めて自分のしてしまった事の大きさについて認識した。
蝶子と稔のパスポート更新申請は何の問題もなく受理された。蝶子の方はともかく、稔については捜索願が出ている可能性もあったので、更新時につかまる事も予測していたが、それは杞憂だった。遠藤陽子と家族が連絡を取っていれば、稔が元氣にヨーロッパ各地を動いているのはわかる。すでに失踪から五年が経っている。家族は必死に探してはいないのだろう。
「ねえ。氣になるんでしょう。帰りたいんじゃないの？」
蝶子が言った。稔は二日経ってもしょっちゅう戸籍謄本を取り出してはしまっていた。いつもの稔らしくない逡巡ぶりは、自分たちへの遠慮だと感じた蝶子は、余計なお世話だと知りつつもちょっかいを出したのだ。稔は激しく首を振った。
「馬鹿なことを言うなよ。帰りたくなんかないし、だいたい帰れねぇよ」
「せめてお母さんに電話してみれば？」
「親父が死んだのは三ヶ月も前だ。俺が今ごろ電話をかけたところで何も変わんねぇよ」
意固地になっている稔に、蝶子はそれ以上何も言わなかったが、このままにしておくわけにはいかないと思っていた。もう少し様子を見なくちゃ。

ヨーロッパ連合の外から来て不法滞在を続けている蝶子と稔のヴィザを取得するためにカルロスは己の政治力をフル活用していた。残りの二人にヴィザは不要だが、まとめて健康保険に加入させるために、住所登録をこの館にした。書類作成のために全員のパスポートから名前を移していて、ドイツ人の番にカルロスの太い眉はふと顰まった。アーデルベルト・ヴィルフリード・フォン・エッシェンドルフ？
貴族か？　しかもこの名前には聞き覚えがある。ローマで蝶子の打ち明け話を聞いた時に何度も出てきた、忘れられない名前。エッシェンドルフ教授。アーデルベルトの生誕地はミュンヘン。

カルロスは蝶子と稔がパスポートを受け取りに行き、レネがイネスにエンパナディーリャの作り方を習っている隙に、静かにヴィルを書斎に呼び寄せた。ヴィルは黙って従った。

「あなたは、マリポーザの事が好きなんでしょう」
ヴィルは憮然として答えなかった。カルロスは笑って言った。
「心配いりませんよ。私だってもちろん彼女を深く愛していますが、あなたのようにではない。あなたが苦しむような事は私と彼女の間には何もないんですから」
「余計なお世話だ」
取りつく島もなくヴィルは答えた。
「その通りです。しかしね。住所登録の手配をした時に、あなたとレネさんの正式な名前が必要になりましてね。あなたの名字が氣になったんです。同じ姓をマリポーザから聞いていたので。マリポーザはあなたの正式な名前を知らないんでしょう」
ヴィルはじたばたしなかった。してもしかたないという風情だった。いずれはわかってしまうのだ。
「知っていて黙っているはずはないと思う。言っておくが、あいつは一度だって本名を言えともパスポートを見せろとも言わなかった。だが、俺自身が出来る事なら知られたくないと思っていたのは事実だ。あんたが俺を追い払いたいならあれを見せれば十分だ」
「そんなことはしませんよ」
「なぜ？」
「マリポーザを愛しているからですよ。それからArtistas callejerosをね。あなたたちに亀裂を入れてしまったら、マリポーザは私を決して許さないでしょう」

グエル公園で、四人は新しい試みに挑戦していた。名付けて『銀の時計仕掛け人形』。ヴィルがパントマイムでよくやるように、全身を銀色の衣装で包み、顔も銀色にメイクする。蝶子は銀の長髪のカツラを被った。そして、止まったままで通行人を待つ。目の前の箱にコインが入れられると、金額に応じた長さでそれぞれが持ち芸を披露する。一ユーロだと数小節だが紙幣なら一曲弾く。もし、二人の前に同時にコインが入れられると、組み合わせ芸を披露する。二十ユーロ紙幣などを入れられた場合には、四人が音楽劇を披露することになる。

初めは勝手のわからなかった通行人も、このルールがわかると、それぞれがちゃりんちゃりんとコインを入れ始める。そうなると四人は目も止まらぬ速さで、ありとあらゆる組み合わせの芸を披露しなくてはならなくなる。蝶子とレネ、ヴィルと稔、稔とレネ、蝶子とヴィル、三人ずつ、もしくは四人全員。人通りの多い時間は止まっているパントマイムをする暇などほとんどなくなる。

四人はこの方法だと通常の三倍を軽く稼げることを知った。
「でも、こんなの毎日はやってられないわ」
コルタドの館に戻ると、蝶子はぐったりして言った。今日はどうしても熱いお風呂に浸からなきゃ。
「それに、この銀のドウラン、落ちやしない。本当にお肌に悪そう」
ぶつぶつと文句を言う。それでいてやけに充実感がある。
カルロスは、『銀の時計仕掛け人形』をやった日は、四人が遅くまで酒盛りをせずにさっさと寝てしまうのでおかしくて笑った。

稔は、仕事をしていないときは、ずっとふさぎ込んでいた。日本に帰って、家族とのことをきちんとしたいという思いは、ここ数日どん

どん大きくなっていた。

これまでは、家族のことを思い悩んだりはしなかった。自分が帰国せずに失踪したことで、遠藤陽子に悪いことをしたという思いはずっとあった。安田流中の笑い者にしてしまったのだ。いくらヘビ女でも、そうとう傷ついたことだろう。だが、安田流に対してや、家族に対しての罪悪感はそれほどなかった。稔が家元を継ぐと言う話は公のものではなかった。単に皆がそうだろうと思っていただけのことだ。

蝶子と違って、稔は三味線で名を成したいと思ったことは一度もなかった。それは、稔が常に認められていたからだった。ジュニアの頃からいつも稔は発表会のトリを務めていた。家元の長男として、三味線を弾くことは禁じられるどころか多いに推奨されていた。稔は三味線が好きだった。純粋に好きだった。それは有名になるための手段でもなければ、次期家元として持つべき技量でもなかった。それが檜舞台であろうと、ヨーロッパの街角であろうと全く違いを感じることはなかった。

だが、家族にとっては、そうではなかったのだ。

稔は、氣っぷがよく一緒に酒を飲むのが楽しい父親が好きだった。優しく暖かい母親が懐かしかった。頼りないが優しい弟とも上手くいっていた。ただの家族でいられたらどんなによかったのだろうと思う。だが、安田流創立者の長男と、その一番弟子で家元を継いだ妻の間に生まれた以上、暖かい核家族の部分だけを求めることはかなわなかった。

安田流と遠藤陽子から逃げ出したということは、すなわち、大切な家族を失うことでもあった。あの時、粉々に引き裂いて空に投げた航空券の紙吹雪は、家族との絆をも引き裂いてしまったのだ。そんなことをすべきだったのだろうか。、どうして自分はこんなところで、一人楽しく生きているんだろう。それでいいんだろうか、稔は迷って考え込んでいた。

だが、稔はいま一人で日本に行くと、自分のいないうちに仲間たちが解散してしまうのではないかという不安を持っていた。イタリアにいた頃のArtistas callejerosだったら、「きっと待っていてくれる」とのんきに思えたかもしれない。だが、今のArtistas callejerosがどれほど危ういバランスの上に立っているか、稔は承知していた。稔は自分がチームをつなぎ止めているとは思っていなかったが、残りの三人だけでいつまでも保っていられるような状態でないこともよくわかっていた。ヴィルと蝶子の間にある不穏なアイレを中和するのは、レネ一人には荷が重すぎる。レネはそういうキャラクターではない。今、自分が離れたら、一週間もしないうちにチームは空中分解して、何もなかったかのように消えてしまうかもしれない。それは自分の片腕をもがれるような感覚だった。

蝶子は、もうこれ以上放っておくわけにはいかないと思っていた。稔はArtistas callejerosにはいなくてはならない存在だったが、心だけ日本に飛ばしておくわけにはいかなかった。放っておけば稔の心と体は完全に分離してしまう。それはArtistas callejerosの危機だった。稔は日本に行かなくてはいけない。なんとしても。でも、そうしたら私たち三人で待っていなくちゃならない。帰ってくるかどうかの保障もないのに。困ったわね。

「ねえ。次の行き先の事だけれど」
蝶子が意味ありげに言った。稔は上の空だった。だが、他の二人は蝶子の言い方に反応した。
「私、久しぶりに日本に帰りたいんだけれど」
稔ははっと振り向いた。何か稔がいう前に、急いでレネが言った。
「僕、一度日本に行ってみたかったんです。大賛成」
「俺も二人も通訳がつくなら悪いアイデアじゃないと思う」
ヴィルも間を置かずに言った。
「お前ら、何考えているんだよ。航空券だけでいくらすると思っているんだ」
「バンを買うのが少し遅くなるだけよ。どうせ私たちずっと一緒に稼ぐんじゃない」
「ダメだよ。日本なんかじゃまともに稼げないし、宿泊もどれだけかかると思っているんだ」
「だって、多数決ですもの。もう決まっちゃったのよ。なんとかなるわよ。私、日本にまだ銀行預金残っているし」
稔は地団駄踏んだ。俺はなんて馬鹿なんだ。俺があんな状態でいたら、こいつらがそう言い出すのは予想できたのに。畜生。テデスコに無表情の演技の指導でもしてもらうんだった。
だが、結局は稔も三人の好意を受け取る事にした。四人で日本に行く。考えてもいなかった解決策だった。自分がいない間に、彼らが消滅してしまうことを恐れる必要はないのだ。
「ありがとう。恩に着る」
四人がその話をしているのをじっと聞いていたカルロスはおもむろに電話をとり、スペイン語で秘書のサンチェスに何かを指示した。夕食前に、サロンでヘレスを楽しんでいる頃、サンチェスがやって来てカルロスに書類ばさみを手渡した。
カルロスは、それを一番近くにいたヴィルに渡した。四人分の東京までのイベリア航空のチケットだった。ヴィルは片眉をあげて驚きを示し、自分の分をとって残りを隣の稔に渡した。稔は目を瞠りそれらを各自に渡した。蝶子もレネも自分の目が信じられなかった。
「カルちゃん……。どうして」
「バルセロナからの往復です。マリポーザ。あなた方が必ず帰ってきてくれるように、私の保険みたいなものですよ。バンのために貯めたお金は、宿泊代などで入り用でしょうからとっておきなさい。あなたたちも時にはただの休暇の旅行が必要なんですよ」
「ありがとう。この恩は決して忘れないわ」
そういって蝶子はカルロスに抱きついて頬にキスをした。レネは目を剥いた。ヴィルは目をそらした。稔は天井を見上げた。
「私も一緒に美しい通訳つきで日本旅行をしたいのは山々なんですが、ここのところ珍しく仕事が詰まっていましてね。でも、次回はぜひご一緒させてください」
「もちろんよ」
蝶子は最高の微笑みを魅せた。この女。稔は腹の中でつぶやいた。しかし、カルロスの助けは有難かった。
四人は初夏のグエル公園で再び『銀の時計仕掛け人形』にトライし

た。日本に行くとなるとそうとう物入りになる。そう思っただけで蝶子の闘志に火がついた。ドウランがお肌に悪いとか言っている場合じゃないわ。蝶子が俄然やる氣になったので、他の三人は容赦なく、このやたらと氣力と体力の必要な仕事を毎日決行した。そのうちに一時的にグエル公園の名物のようになってしまい、週末になると彼らを目当てに集まってくる人まで現われた。

四人は毎日働く場所を変えた。時には竜舌蘭の回廊で、時には破砕タイルのベンチの前で、傾いだ回廊にて。常連客達は喜んで彼らを捜した。ガウディの常識はずれな建築物の数々が、日常生活を忘れさせてくれる。銀色の妙な大道芸人達、えも言われぬ珍妙で楽しい音楽・手品劇。日差しが強くなり、夏の訪れが心を躍らせる。バルセロナの街は人生の喜びを謳歌している。人々の心に魔法をかけつつ、四人もまた、色彩の迷宮を楽しんでいた。

（初出　二〇一一年七月　書き下ろし）